中国の社会主義文化大革命

（第二集）

北　京　　外文出版社

中国の社会主義文化大革命

（第二集）

外文出版社
北　京

目次

反党・反社会主義の黒い糸にたいしてたたかいの火ぶたを切る……高　炬…5
目を皿にして真偽を見分けよ……何　明…11
鄧拓の『燕山夜話』は反党・反社会主義の黒い話である……林　杰　馬沢民　閻長貴　周　英　滕文生　靳殿良　共　編…17
『前線』と『北京日報』のブルジョア的立場を評す……戚本禹…63

反党・反社会主義の黒い糸に
たいしてたたかいの火ぶたを切る

高　炬

毛主席はつねに、銃をもった敵が滅ぼされてからも、銃をもたない敵は依然として存在するのであって、かれらはかならずわれわれと死物狂いのたたかいをするであろう。われわれはけっしてこれらの敵を軽んじてはならない、とわれわれをいましめている。社会主義の全段階を通じて、社会主義と資本主義の二つの道の闘争がつらぬいているのである。社会主義建設を保証し、資本主義復活を防止するためには、かならず政治戦線、経済戦線、思想・文化戦線において社会主義革命を最後までやりとげなければならない。われわれは毛主席の教えをしっかりと心に刻み、絶対にイデオロギーの分野における敵をおろそかにしてはならず、絶対に階級闘争を忘れてはならない。

鄧拓（トントー）の『燕山夜話』および呉（すなわち呉晗（ウーハン））南（馬南邨（マーナンツン）すなわち鄧拓）星（繁星（ファンシン）すなわち廖沫沙（リャオモーシャー））の名で書かれた『三家村ノート』は、われわれの社会では、階級闘争がなおもひじょうにするどく、複雑で、激しいものであることを十分に物語っている。階級敵は外部からだけでなく、内部からも死物狂いになってわれわれを破壊し攻撃してくる。しかも、すべての反党・反社会主義分子は、その攻撃のホコ先を、つねにわれわれの党と社会

主義制度に向けてくるのである。

鄧拓は、呉晗、廖沫沙とひらいた〈三家村〉という殺人宿の番頭であり、このひとにぎりの反党・反社会主義分子の頭目である。かれらは『前線』『北京日報』『北京晩報』を握ってそれを反党の道具にし、おびただしい毒矢を放って、党と社会主義に気違いじみた攻撃をくわえてきた。

鄧拓らひとにぎりのものの反党・反社会主義の活動はけっして偶然の、孤立した現象ではない。一九五八年、わが国の人民は、毛沢東思想の輝かしい光に照らされ、党の総路線にみちびかれて、大いに意気込み、つねに高い目標をめざし、全面的な大躍進を実現した。政治戦線、経済戦線、思想・文化戦線では、万雷がいっせいにとどろく勢いで、資本主義と封建残存勢力に烈しい打撃をあたえた。社会主義革命がいっそう深まる状況のもとで、党内の右翼日和見主義分子は帝国主義、現代修正主義および国内の地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子の必要にとたえ、一九五九年の党の廬山会議で、党にたいして気違いじみた攻撃をくりひろげた。党中央と毛主席のすぐれた指導のもとに、これらの右翼日和見主義分子にだんことした反撃をくわえ、かれらの「武装」を解除し、かれらの職を解き、かれらの反党的陰謀を徹底的に粉砕した。その後、一九五九年から一九六二年にかけて、連続数年にわたるきびしい自然災害とフルシチョフ現代修正主義者の破壊によって、わが国は一時的な経済困難にみまわれた。このとき、内外の階級敵はこれさいわいとばかりにつぎつぎとおどり出し、党内の右翼日和見主義分子もかれらに呼応して、党にたいしてあらたな進攻をくわえてきた。鄧拓一味は、まさにこうした状況のもとで、待ちきれなくなって「門をつき破っておどり出した」のである。

党と社会主義にたいして骨の髄まで憎しみをいだく鄧拓一味は、一九六一年からかれらの『燕山夜話』『三家村ノート』を放出した。かれらは歴史を語り、知識をつたえ、物語や笑話を話すことを看板にして、むかしのことをもちだしていまを風刺したり、あてこすりをいったり、暗に人を中傷したり、遠回しに突いたりする手口で、われわれの偉大な党に全面的なあくどい攻撃をくわえた。わが党を「熱狂的」だとか、「高い熱を出した」とか、「偉大な空言」をいったとか、「健忘症」にかかったと罵った。総路線、大躍進は「ほら吹き」であり、「奇抜な考え」であり、「空想でもって現実にとってかえた」ものであり、「卵一つの財産」を「ぜんぶつぶしてしまい」、事実のまえに「頭をぶつけて血を流した」とあくどく攻撃した。懸命に、免職になった右翼日和見主義分子のために大声をはりあげて冤罪を訴え、かれらの反党的「根性」と「叛逆精神」をほめそやし、かれらの再起をはげました。プロレタリアート独裁を中傷し、社会主義制度にたいする不満を必死になってあおりたて、腐敗、没落した封建道徳とブルジョア思想をもちあげ、資本主義復活のためにドラを鳴らし道を開こうとした。鄧拓にいたっては、わが党に、すみやかに引き下がって「休め」、なにもいわず、なにもなさず、すべてかれらの「指導」にしたがい、かれらに、われわれに対する独裁をおこなわせるように気違いのようにわめきたてさえした。

同志諸君、思いおこしていただきたい。フルシチョフ現代修正主義者はわれわれのことを「大風呂敷」「ほら吹き」だと罵り、大躍進のことを「冒険主義」だと罵ったのではなかったか？　わが党内の右翼日和見主義分子を「十分な勇気がある」とほめたたえたのではなかったか？　鄧拓の反党・反社会主義のわめきと、フルシチョフ修正主義者のわれわれにたいする中傷と攻撃はまったく同じではないか！

鄧拓の『燕山夜話』は正真正銘の反党・反社会主義の黒い話である。われわれはそれをつかまえ、見破り、あ

ばき出し、化けの皮をはぎとり、鄧拓らひとにぎりのものの反党・反社会主義の醜悪な正体をあますところなく白日のもとにさらけださなければならない。借りた金はかならず返さなければならない。鄧拓は「ごまかしすまし」「三十六計、逃ぐるにしかず」と考えているが、それは絶対にできないことである。鄧拓が逃げられないだけでなく、かれの仲間も逃げることはできない。『燕山夜話』『三家村ノート』が根こそぎにされるだけでなく、≪海瑞（ハイルイ）の免官≫≪李慧娘（リーホイニャン）≫≪謝瑤環（シェヤオホワン）≫、および≪長短録≫のなかの毒草など、およそ反党・反社会主義のしろものはすべて例外なく、根こそぎにされなければならない。

とくに注目しなければならないのは、四月十六日、『北京日報』が、「〈三家村〉と『燕山夜話』についての批判」という全段ぬきの大見出しで、三ページにわたる資料を発表し、さらに、『前線』と『北京日報』の編集者のことばを発表したことである。『前線』『北京日報』は長期にわたって呉晗らを掩護してきたが、いま急に「積極的」になり、あわててこうしたしろものを放出したのは、いったいどういうわけなのだろうか？　かれらは本当に「まじめな批判をくりひろげる」つもりなのだろうか？　そうではない、まったくそうではない。ここには大いにいわく因縁があるのである。かれらは批判に名をかりて掩護をし、闘争の看板をかかげて庇護をしているにほかならない。

『前線』と『北京日報』の編集者のことばは、鄧拓というこの反党・反社会主義の殺人宿の番頭を小僧の地位に格下げし、鄧拓のこのような重大な問題に痛くもかゆくもない程度にほんのひと言ふれただけである。これでは、きみたちの番頭にたいしてあまりにも済まないのではないか？　きみたちが苦心さんたんして編集した三ページにわたる資料は、「長髪を賛美する」とか、「ネコや犬の飼育を提唱する」とか、「芸術は古いほどよい」

とか、「封建士大夫の有閑生活と雅趣をたたえる」とか、「封建的な迷信を提唱する」とか、等々といった副次的なしろものを紙面のもっとも目立つところにおいて大幅のスペースをあてたが、鄧拓の反党・反社会主義のもっとも主要なしろものは、ほんのわずかしか載せず、しかも目立たないところにおいた。きみたちのこうした重大なものを避けて二次的なものを取り上げ、大きな問題を小さな問題にかえるやり方は、いったいなんのためなのだろうか？

『前線』と『北京日報』は、これまで鄧拓ら一味の文章を発表したが、「すぐには批判しなかった」のは、頭のなかに「ブルジョアジーと封建階級の思想の影響があって」「文化・学術戦線での階級闘争の手をゆるめていた」「プロレタリアートの政治による統率を実行しなかった」「立場を見うしなうか、警戒心をうしなった」からであると申し訳程度の「自己批判」をやっている。われわれはきみたちのこの「自己批判」を読んで、まさにきみたちの鄧拓がいっているように、「唖然として失笑」を禁じえなかった。きみたちは、長期にわたって鄧拓ら一味の文章をあれほど多く発表し、毒をあれほど多くばらまき、暗雲をまきおこし、反党・反社会主義の道具になってきたが、そうなるのに、わずかばかりの「ブルジョアジーと封建階級の思想の影響」で十分だったのだろうか？　呉晗の反党的正体がすっかり暴露されると、きみたちはなんとまた「周瑜（チョウユイ）が黄蓋（ホワンカイ）を打つ」茶番劇を演出し、呉晗にたいする向陽生（シャンヤンション）つまり鄧拓のニセの批判を発表して、呉晗の反党的な極悪非道の犯罪行為を「道徳継承論」の学術問題であるといいくるめ、呉晗を罪から救いあげ、また、鄧拓を保護して逃がそうとした。いまにいたっても、きみたちはなおひきつづき、あの手この手を使って頑強に抵抗している。これは「立場を見うしなうか、警戒心をうしなった」とか、「階級闘争の手をゆるめていた」とかといったことだろうか？　そうでは

ない！　きみたちはけっして立場を見うしなってはおらず、きみたちの立場はひじょうにしっかりしており、ただ、ブルジョアジーの立場に立っているというだけである。きみたちはけっして階級闘争の手をゆるめてはおらず、階級闘争をいささかもゆるがせにしていないのであって、ただ、プロレタリアートにたいして闘争しているというだけである。

階級が存在するかぎり、階級闘争が存在する。これは必然的な法則である。われわれの内部からひとにぎりの反党・反社会主義分子をつまみ出すことは、悪い事ではなくたいへんよい事であり、これは毛沢東思想の偉大な勝利である。ひとにぎりの反党・反社会主義分子の中傷と攻撃は、何匹かのハエがブンブンいっているにすぎず、わが党の偉大な輝きをいささかもそこなうことはできない。われわれは反党・反社会主義分子らにいっておく。きみたちの方が早くから党と社会主義にたいしてたたかいの火ぶたを切ったのである。「来て往かざるは非礼なり」われわれは絶対にきみたちを見逃しはしない。すべての妖怪変化を見逃しはしない。かならず反党・反社会主義の黒い糸にたいしてたたかいの火ぶたを切り、社会主義文化大革命を最後までやりぬき、完全な勝利をかちとるまでは、けっして兵をひきあげないであろう。

（もと、一九六六年五月八日づけ『解放軍報』に掲載）

目を皿にして真偽を見分けよ

何　明

四月十六日、『北京日報』は「〈三家村〉と『燕山夜話』についての批判」という全段ぬきの大見出しを使って、三ページにわたる資料を発表し、さらに、『前線』と『北京日報』の編集者のことばを発表した。見たところ、ひじょうにはなばなしく、革命的であり、しかも率先して鄧拓とかれの『燕山夜話』にたいして批判をおこなっているように思える。これはいったいどういうことなのだろうか？　階級闘争はひじょうに複雑であって、われわれは目を皿にして真偽を見分け、けっしてペテンにかかるようなことがあってはならない。

『前線』と『北京日報』の編集者のことばは、「〈三家村〉と『燕山夜話』にたいしてまじめな批判をくりひろげる」とのべている。これは本当だろうか？　いや、そうではない。これは偽りの批判と真の掩護、偽りの闘争と真の庇護なのである。

鄧拓は反党・反社会主義の〈三家村〉の村長であり、かれら一味の頭目である。ところが、編集者のことばは鄧拓の反党・反社会主義の問題にぜんぜんふれていない。呉晗と廖沫沙は早くから暴露されているので、かれらの反党・反社会主義についてはいわざるを得なかったが、それでも『前線』と『北京日報』の編集者のことばに

よると、呉晗は総司令官であり、廖沫沙は「主将」であるが、鄧拓はたんなる一兵卒であって、かれはなにもわからぬうちに誤りを犯したにすぎず、それは思想意識の問題にすぎないかのようである。

これは読者をあざむくものである。

呉晗、廖沫沙、鄧拓のいくつかの文章をあらためて発表した紙面と、「『燕山夜話』はいったいなにをふいちようしたか」という資料は、偽りの批判と真の掩護、偽りの闘争と真の庇護という意図のもとに、念入りに編集されたものである。

鄧拓の「『健忘症』の専門治療」はもっともあくどい反党文章であり、かれはこの文章のなかで、わが党をあくどくののしっている。この文章は早くからいちぶの同志のはげしい反対にあった。そこで、『北京日報』はやむを得ずこれをあらためて発表したのだが、見出しは小さな活字で組んでいた。われわれは聞きたい。この文章は「重要」でなかったのか、それともきみたちが目標を小さくして読者をごまかすつもりだったのか？　きみたちの編集者のことばは、なぜこのもっともあくどい反党文章にひと言もふれなかったのか？

「『燕山夜話』はいったいなにをふいちょうしたか」という資料について、つぎのように簡単に概括することができる。つまり、副次的なものをきわだたせて、主要なものをおおいかくし、重大なものを避けて二次的なものを取りあげ、大きな問題を小さな問題にかえている。

たとえば、鄧拓の「王道と霸道」というむかしのことをもち出していまを風刺しているこの随筆は、プロレタリアート独裁をあくどく攻撃したものである。鄧拓自身も、かれが歴史上の「王道と霸道」をうんぬんしたのは、われわれに「経験と教訓をさがし出させる」ためであるとはっきりいっている。ところが、『北京日報』は、そ

れを「封建社会制度を全面的に美化」という見出しのもとに組み入れている。これはなぜだろうか？　「王道と霸道」というこの文章は本当に歴史についてのべているのだろうか？　もし歴史についてのべているのだとすれば、かれが歴史上における王道は霸道よりましだといっていることが、どうして「封建社会制度を全面的に美化」していることになるのだろうか？　文章は表題とあっておらず、表題は文章とあっていない。こうなったのも、鄧拓の問題を、「大きな問題を小さな問題にかえ」ようとしたためである。

「封建支配階級も民力を大切にすることを知っていたと説く」「芸術は古いものほどよい」「封建的な迷信を宣伝する」といったたぐいの小見出しもみな、鄧拓の問題を、「大きな問題を小さな問題にかえる」手口である。

しかし、「むかしのことをもち出していまを風刺し、遠回しに攻撃する」のような一見もっともらしい見出しもある。ところが、ここに抜粋されている内容はひじょうにとぼしく、小見出しはなおさら奇怪である。小見出しのひとつは「『空想でもって現実にとってかえること』を風刺する」であり、もうひとつは「いわゆるほら吹きを風刺する」である。『前線』と『北京日報』に聞きたい。きみたちはここでなぜひと言もいわなかったのか？　なぜ鄧拓の反党・反社会主義を出そうとしなかったのか？　「いまを風刺する」とは誰を風刺するのか？　また、「遠回しに攻撃する」とは誰を攻撃するのか？　鄧拓の「むかしのことをもち出していまを風刺し、遠回しに攻撃する」、つまり反党・反社会主義は、その内容がきわめて豊富であるが、なぜ、きみたちはあれだけしか抜粋しなかったのか？

それはひじょうにはっきりしている。文化革命が深まるにしたがって、鄧拓、廖沫沙、呉晗らの反党・反社会

主義の正体がさらけだされたので、『前線』と『北京日報』はあわてて「〈三家村〉と『燕山夜話』についての批判」という旗をひろげ、一部の資料を発表したのである。いわゆる「まじめな批判をくりひろげる」というのは偽りであって、陣地を縮小して掩護することこそがその真のねらいなのである。

『前線』と『北京日報』の編集者のことばはまた、わざとらしく、「こんどの闘争のなかで、われわれが得た教訓は深刻なものである」などといっている。どのような深刻な「教訓」なのだろうか？

曰く、これまで「われわれは文化・学術戦線での階級闘争の手をゆるめていた」。本当に「手をゆるめていた」のだろうか？　そうではない。きみたちは数年まえ、おびただしい毒草をばらまいて、党にあくどい攻撃をかけ、社会主義に反対し、これらの毒草を批判する原稿をにぎりつぶして発表せず、しかも、あの手この手を使って鄧拓らを弁護した。《海瑞（ハイルイ）の免官》にたいする批判が展開されると、きみたちはまた、向陽生（シヤンヤンション）つまり鄧拓の「《海瑞の免官》から〈道徳継承論〉におよぶ」を発表して、呉晗の反党・反社会主義の政治問題をいわゆる道徳継承という「純粋」の学術の領域へ引きずりこみ、こんどの大論争を右旋回させようとやっきになった。これを、階級闘争の手をゆるめていたといえるだろうか？　そうではない。きみたちはほかでもなくブルジョアジーの側に立ってプロレタリアートにたいする階級闘争をつよめていたのである。

曰く、「本誌および本紙は、これまでこれらの文章を発表したが、すぐには批判しなかった」。なんと調子のよいことか！　すぐには批判しなかったということだけなのだろうか？　以前のことはさておくとしても、《海瑞の免官》にたいする批判が展開されてから今日にいたるまで、きみたちの両編集部はなぜいまだに「これらの文章」にたいして真の批判をやらないのか？　放火犯があとになって、自分の誤りはすぐに火を消しとめなかったことだといったところで、人びとをあざむくことができるだろうか？

曰く、「立場を見うしなうか、警戒心をうしなった」。そうだろうか？　きみたちはけっして立場を見うしなってはおらず、きみたちの立場はひじょうにしっかりしている。それはブルジョアジーの立場である。「警戒心をうしなった」というのはたしかかもしれない。きみたちは情勢を見あやまり、数年まえ、すでに「時機」が到来したと考えて、さかんに毒草をばらまいた。そして、《海瑞の免官》にたいする批判が展開されると、きみたちは逃げきれると考え、あの手この手を使って悪人をかばった。こうして、きみたちの正体も暴露してしまったのであるが、これも「警戒心をうしなった」といえるだろう。

われわれは『前線』と『北京日報』にたずねざるを得ない。ここ数年らい、きみたちはいったいプロレタリアートの陣地にあったのか、それともブルジョアジーの陣地にあったのか？　きみたちはプロレタリアート独裁の道具だったのか、それとも資本主義復活を宣伝する道具だったのか？　きみたちはいったいどこまでつっ走るつもりなのか？

胸につかえるものがあったので、いわざるを得なかったが、間違っているところがあれば、『前線』と『北京日報』の批評と叱正を受けたい。

（もと、一九六六年五月八日づけ『光明日報』に掲載）

鄧拓の『燕山夜話』は反党・反社会主義の黒い話である

林　杰　馬沢民　閻長貴
周　英　滕文生　靳殿良　共編

まえがき

一九六一年いらい、鄧拓（トントー）は『前線』『北京日報（ペイチン）』『北京晩報』などの新聞・雑誌に、一連の反党・反社会主義の文章を発表し、党と社会主義にたいして気違いじみた攻撃を加えてきた。これらの反党・反社会主義の言論は、当時、多くの同志たちの反対をまきおこし、同志たちは、『前線』『北京日報』『北京晩報』に批判文章を出した。だが、『前線』『北京日報』『北京晩報（ウーハン）』はそれをにぎりつぶして発表しなかった。

さいきん、呉晗（ウーハン）、廖沫沙（リャオモーシャー）らの反党・反社会主義の正体が完全に暴露されたため、鄧拓の反党・反社会主義の正体もこれ以上おおいかくせなくなった。そこで、『前線』と『北京日報』はあわてて『燕山夜話』の抜粋資料に編集者のことばをつけ加えて発表した。

この『前線』と『北京日報』の編集者のことばは鄧拓の反党・反社会主義にふれていない。また、この思想のもとに編集された『燕山夜話』にかんする資料も、鄧拓の反党・反社会主義の根本問題を極力おおいかくしている。

われわれは、鄧拓の『燕山夜話』は反党・反社会主義の黒い話であると考えている。したがって、われわれもここに、自身の観点から抜粋した『燕山夜話』の資料に評語をつけ加えて発表する。読者のみなさんがこれらを比較、対照しながら、研究されるようお願いしたい。

一、われわれの偉大な党をあくどく攻撃している

東風が西風を圧倒するという科学的断定を「偉大な空言」「使いふるしの歌い文句」とあくどく攻撃している

「ある人はなかなかの能弁家で、いかなる場合でも口が休まることなく、せきを切った川のように滔々としゃべりまくる。だが、話を聞きおわって思い返してみると、かれがなにをしゃべったのかさっぱり記憶にのこっていないのである」

「ながながとしゃべったが、さっぱり要領をえず、説明すればするほどわけがわからなくなったり、あるいは説明しなかったのに等しいというのが、偉大な空言の特徴である」

「この種の偉大な空言は、ある特殊な場合にはさけられないものであり、したがって、ある意味ではその存在の必要性があるということは否定できない。だが、それを一般化し、ところかまわずいいまわったり、はなはだしきはこれを特技にしたりするならば、それこそおそろしいことである。もし、空言を話す技術をわれわれの次の世代に教えこみ、この面の専門家を多数養成するならば、それはなおさら不幸なことである」

「たまたま、さいきん、わたしの家の近所の子どもが大詩人気取りで多くの『偉大な空言』をかいた。……ついさき頃も、この子は『野草をたたえる』という詩をかいたが、この詩は空言ずくめであった。つぎはその詩である。

『天はわれわれの父
地はわれわれの母
太陽はわれわれの乳母
東風はわれわれの恩人
西風はわれわれの敵』」

「この詩のなかには、天地、父母、太陽、乳母、東風、西風、恩人、敵といった人の目を引くことばがならべてあるが、それらは濫用されており、使いふるしの歌い文句となっている」

「もっとも偉大なことばを並べたててみたところで、それはなんの役にも立たない。はなはだしきは、それらを多く口にすればするほどかえって悪い結果をまねくだけである。そこで、わたしは、好んで偉大な空言を口にする友人たちに、多く読め、多く考えよ、しゃべるのをへらせ、しゃべる必要のあるときには休め、きみと他人の時間と精力をむだにするな！　と忠告したい」

「『偉大な空言』」『前線』一九六一年第二十一号

評語　「東風が西風を圧倒する」というこの科学的断定は、一九五七年十一月十八日、毛主席が各国共産党・労働者党代表者会議で提起したものである。それは国際情勢があらたな転換点にきており、社会主義勢力がすでに帝国主義勢力を圧倒していることを形象的に指摘している。東風とはプロレタリアートとアジア・アフリカ・ラテンアメリカの被抑圧人民の帝国主義に反対する革命勢力のことであり、西風とは腐敗した帝国主義とすべての反動勢力のことである。「東風」をたたえ、「西風」をにくむのはまったく正しい。鄧拓はなぜことさらに、「東風」が「恩人」であり、「西風」が「敵」であるというのを、「偉大な空言」、「使いふるしの歌い文句」と中傷するのだろうか？　フルシチョフ修正主義者はかつて、「荒唐無稽な『西風と東風』の競争についての教条主義理論をいっそう勇敢に、断固として暴露しなければならない」とあおりたてた。ここで、

鄧拓はフルシチョフとまったくおなじ調子の歌をうたっているのである。

わが党の指導部を「利口であるとうぬぼれ、大衆を見くだしている」といって、暗に攻撃している

「人間の知恵というものはけっして無限のものではない。なにもかも知ろうと思ったり、かぎりない知恵をもとうと考えたりするのはおろかものの妄想であるにすぎず、実際には、そんなことはできるわけがない。……一見、たいへん利口そうに見える人間がいるが、厳格にいえば、それは、みかけが利口なのか、あるいは少しばかり利口なだけであって、本当に利口なのではなく、ましてやひじょうに利口であるなどとはなおさらいえない」

「老子とその後の六国の諸侯はみな極端な立場をとり、前者は知恵や分別を排してすべてを否定することを主張し、後者はじぶんの知恵にたよって、自身を盲目的に信じたため、当然、どちらもよい結果を得なかった。かれらの欠陥は大衆の知恵を重んじなかったことにある」

「もっともすぐれたはかりごとは大衆のなかからのみ生まれる。漢の元帝のときの宰相匡衡（クワンハン）は、奏書のなかで、『臣は、ひろく人びとの意見をもとめることは天の御意にかなうものであると聞く』といった。……漢の光武帝のときの有名な学者鄭興（チョンシン）も劉秀（リュウシュウ）に、『ひろく人びとの意見をもとめ、下部の大衆からの策を受けいれよ』と勧めた。宋代の范仲淹（ファンチュンイエン）の子、范堯夫（ファンヤオフー）は司馬光（スーマークワン）に、『あなたは大衆に議論させるように謙虚であってほしい。か

ならずしも自分で計画をたてる必要はない。自分で計画をたてれば、おべっか使いがそれにつけこんで、取り入るようになる』と勧めた。これら昔の人びとの見解はいずれも立派なものである。とくに、范堯夫がいった『かならずしも自分で計画をたてる必要はない』という点は注目に値する。**ある人はしばしば自分の能力を自慢したり、利口であるとうぬぼれたりして、大衆を見くだし、何事をとわず自分で計画をたて、他人の意表をついて成功をねらい、下部の大衆の立派な意見をうけいれようとしない。**こういった欠点をもつ人はもしそれを自覚せず、なおさないならば、結局いつかはひどい目にあうであろう」

「知謀はたよりになるか」『燕山夜話』第四集十七～十九ページ
もと、一九六二年二月二十二日づけ『北京晩報』に掲載

評語　こんにち、鄧拓は匡衡が漢の元帝に「ひろく人びとの意見をもとめる」よう勧めたとか、鄭興が漢の光武帝に「下部の大衆からの策を受けいれる」よう勧めたとかさかんにいっているが、これはいったいどういうことなのだろうか？　これは、われわれの偉大な党を「利口であるとうぬぼれ、大衆を見くだしている」といって暗に攻撃しているのである。これらのことばをフルシチョフ修正主義者のわれわれを中傷することばとくらべて見れば、ひじょうにはっきりする。鄧拓のことばと現代修正主義者のわが党にたいする中傷は全く同じではないか？

「じぶんの言ったことを守らない」「まったく信頼できない」といって、わが党を中傷している

「世間には病にかかっている人がずいぶん多い……その病気のなかに『健忘症』というのがある。はなはだ厄介な病気で、これにかかると、なおすのが容易でない」

「この種の病人によく見られる症状は……じぶんの言ったことを守らず、言うことに信実性がない、ということである。ひどいのになると、気違いやバカのまねをしているのではないかと思われるようなものもいる。だから、こういう病人は、まったく信頼できない」

「明の陸灼（ゲーチュオ）の『艾子後語』に、健忘症の典型的な例として、つぎのような話がのっている。

『斉の国にもの忘れの病にかかった人がいた。歩きだすと止まることを忘れ、横になると立ち上がることを忘れる。妻が心配して、艾子という人がいて賢くて知恵があり、難治の病をなおすそうです。いって見てもらったらどうですかと言うと、その人はよかろうとこたえ、馬にのり、弓矢をこわきにかかえて出かけた。三十里もいかないうちに、便意をもよおしたので、馬からおりて用をたしたが、そのさい、矢を地上にさし、馬を木につないでおいた。用をたしたあと、左の方を見ると矢がある。かれは言った。おお、あぶない！　どこから飛んできた流れ矢だろう。すんでのことにやられるところだった。そういって、こんどは右の方を見ると馬がいる。かれは喜んで言った。流れ矢で肝をつぶしたが、ありがたいことに馬を手にいれることができたわい、と。そういって、馬のたづなを引いて帰ろうとしたが、とたんに、じぶんのしたフンを踏みつけた。かれはじだんだ踏んで言

つた。犬のクソを踏みつけて、惜しいことにくつをよごしてしまった、と。そういって、馬にむちをあて、いままできた道をひき返えしていった。しばらくして、家についたが、門の前をうろうろしながらいうには、ここはだれの家だろう？　艾子の住み家かしら？　と。たまたま、このようすを目にした妻は、夫がまたもの忘れしたのを知って、夫をののしった。かれは悲しげにいった。どちらの奥さんか存じませんが、なぜそんなに口ぎたなくののしるのですか、と。見たところ、この健忘症患者の症状はかなり重い。それにしても、この種の症状が最もひどくなったときには、どのような状態になるだろうか、われわれには推測がつかない。おそらく、気違いになるか、バカになるかのどちらかだろう。

中国の古い医学書によると……この病気の原因のひとつは、いわゆる気脈の不正常である。その結果、もの忘れをするばかりか、しだいに喜怒哀楽の変化がはげしくなり、話すのにひどく骨がおれ、おこりっぽくなり、さいごには気違いになってしまう。この病気のもうひとつの原因は、脳髄の傷害で、患者はしばしば身体がしびれ、血があたまにのぼり、ときには失神状態におちいる。早いうちになおさないと、必ずバカになる。もしこの二つの極端な現象のいずれかが現われたらば、患者はすぐさま十分に休む必要があり、なにもしゃべらず、なにもしてはいけない。無理にしゃべったり、やったりすれば、大変なことになる。

では、このような病気には、なんら積極的な治療法もないというのだろうか。いや、たしかにある。たとえば、……発病したらすぐさま患者のあたまにバケツいっぱいの犬の血を浴びせかけ、あとで冷水で洗いおとすと、すこしは意識がはっきりしてくる。……現代の西洋医学にも、発病時に特製のこん棒で患者のあたまをなぐりつけ、『人事不省』におちいらせたのち、再び意識をとりもどさせるという治療法がある」

「『健忘症』の専門治療」『前線』一九六二年第十四号

評語　これは、あきらかに、怒りと憎しみをこめてわれわれの偉大な党を攻撃した随筆である。どんな医学書を調べて見ても、健忘症の症状として、「じぶんの言ったことを守らず、言うことに信実性がない」、「喜怒哀楽の変化がはげしい」、「バカになる」、「気違いになる」などというようなことは書いてない。犬の血をあたまに浴びせかけるとか、こん棒で患者をなぐりつけて失神させるとか、などという治療法にいたっては、なおさらのことである。明の陸灼の『艾子後語』は政治的な風刺小品であって、医学書ではない。鄧拓がここで論じているのも、政治であって医術ではない。これは、厳として動かすことのできない事実である。

わが党の指導部を「泣きっつらの諸葛亮」といってののしっている

「泣きっつらの諸葛亮なんて、てんで使いものにならない。ところで、泣きっつらの諸葛亮というこのことばは、岳飛の孫にあたる岳柯の著、『桯史』第十五巻の『郭倪みずから諸葛亮に比す』のくだりに出ている。『郭隷が淮東の統帥者として二つの城を築いたとき、倪はその配下にあった。……人と議論しても自負心がつよく、

だれもかれに逆らおうとしなかった。ある日、倪は扇をとりだして、その上に〈三たび訪れをうけ、しきりに天下の計を問わる。二朝に仕えて君を助け民を救う老臣の心〉と題した。つまり、諸葛亮をもって自任しているかれの意中を示したものである。……わたしが泗州（スーチョウ）にいったのは、ちょうど真夏のときであった。いすの上においてあった客用の扇を見ると、はたして以上の二句が書いてある。これで、かねて耳にしていたことが、根も葉もないうわさでないことを知った。そのご、郭倬（クオチュオ）が符離（フーリー）でやぶれ、郭偉（クオチウ）も儀真（ユイチェン）で敗北した。倪は、もう二度と羽振りをきかすことができないのをさとり、客を前にしてはらはらと涙をながした。当時、法曹の職にあった彭法（ポンファ）伝師は、人を皮肉ることのすきな男で、たまたまその席にいたが、その時の倪のようすを他の人に話し、これこそ泣きっつらの諸葛亮だといった。これを伝えきいた人で、手をうって笑わないものはなかった。倪はこれを知って、彭法を罰しようとしたが、免官となったので、ついに果さなかった』

「郭倪のような、泣きっつらの諸葛亮なんて、きくだけでも吹きだしたくなるばかりか、胸がむかついてくる。しかし、それはそれとして、上の話は、また、つぎのことを証明したものとも言える。つまり、**諸葛亮の名をかたったり、諸葛亮ぶったりしても、けっして人をおどかせるものではない。かならず、いつかはその正体をさらけだして、世間の笑いぐさになるものだ**」

「三種の諸葛亮」『燕山夜話』第四集十二ページ
もと、一九六二年三月一日づけ『北京晩報』に掲載

評語　鄧拓は、「泣きっつらの諸葛亮」を口ぎたなくののしって、「諸葛亮の名をかたったり、諸葛亮ぶったり」するものは、かならず、いつかは「その正体をさらけだすだろう」などといっているが、結局のところ、これはだれを指してのことばなのか。もし、地主階級やブルジョアジーのことを指しているなら、なにもそんな遠まわしな言い方をする必要はないではないか。してみれば、わが党の指導部をはずかしめ、ののしっているのだとしか考えられない。

二、社会主義建設の総路線、大躍進に反対し、プロレタリアート独裁を攻撃している

われわれの大躍進を「ほら吹き」であり、「大風呂敷」であり、事実のまえに「頭をぶつけて血を流した」と中傷している

「ひまなときに、外国の民話や寓話を読んでみると、得るところがひじょうに多い。……もし**一を聞いて十を知る理解力**があるならば、どのような妖怪変化がどのような手練手管を用いようと、あなたの慧眼にたちまち見やぶられるであろう」

「『イソップ物語』を読んでみたまえ。なかにこんな話がある。

『ある五種競技の選手が、日頃、勇気がないといって都市の人たちからばかにされていたので、あるとき旅に

出た。しばらくしてもどってくると、かれは方々の都市で数々の勇敢な競技をおこない、とくにロデスではどのオリンピック選手も及ばないほど遠くへ跳んだと大ぼらを吹いた。そしていつかきみたちがあちらへいくようなことがあったら、その場に居合わせた人びとが証人になってくれるだろうといった。そのとき、わきにいた人びとのうちのひとりがかれにいった。きみ、もしそれがほんとうなら、証人など必要ないさ、ここをロデスだと思って跳んでみたまえ』と」

「事実があきらかにしているように、ほら吹きはほらを吹くことしかできず、決して行動することができないのである。いまもこんなほら吹きにはいつ、どこでもお目にかかれる。かれらは、ほらの大小にちがいこそあれ、ほら吹きには変わりはない」

「この話はまた、人びとが、ずるがしこいほら吹きを見破り、そのほらをあばくのをたすける。

イソップのこの話と書き方はちがうが、同じ教訓をのべているものにクリロフの寓話がある。かれはこういっている。『四十雀が海上に飛んでいって、海水をすっかり煮たてて蒸発させてみせるとほらを吹いた。……流言のすきな人が、たちまち広まってきたこのうわさを聞いて、さっそく匙をもって、美味しいスープをのもうと海辺で開かれる宴会にかけつけた』」

「マッハ派はかれらの『心理的要素』の作用なるものを誇大視して、さかんにほらを吹いた。これは、海水をすっかり煮たてて蒸発させてみせるという四十雀のたわ言とまったくおなじではないだろうか？　しかし、マッハ派はかれらの心理的要素の作用をたよりにして、ほしいままにふるまうことができると思い込んでいたが、結果は実際の事物のまえに頭をぶつけて血を流しただけであって、最後にはマッハ派の破産を宣言しなければならなかった」

「外国の寓話ふたつ」『燕山夜話』第五集九十一～九十三ページ
もと、一九六一年十一月二十六日づけ『北京晩報』に掲載

評語　ものを見る目のある人なら、これはわれわれの大躍進が「大風呂敷」であり、事実のまえに「頭をぶつけて血を流した」とあくどくのしっているということがすぐにわかる。もしそうでないとすれば、なぜ鄧拓は「深遠な意義」があり、「深く考え」てみる必要があるなどと、くどくどというのだろうか？　なぜ、いまも、こんなほら吹きには「いつ、どこでもお目にかかれる」などとわめきたてるのだろうか？　物語を語るのに、なぜマッハ派の「心理的要素」の作用を云々するのだろうか？　周知のように、帝国主義とフルシチョフ修正主義者はかつてわれわれの大躍進を「大風呂敷」であり、「冒険的な計画」であり、「唯意志論」であると攻撃した。右翼日和見主義分子もわれわれの大躍進を「熱を出した」とか、「高い熱を出した」とか、「観念論」であるとかと中傷した。これははたして偶然の一致だろうか?!

「『三国志演義』を読んだ人はおぼえているだろうが、諸葛亮が泣いて馬謖（マースウ）を斬るように命じたとき、劉備（リュウベイ）が

生前にいった、馬謖は大風呂敷をひろげるので重用してはならないということばを引き合いにだした。……馬謖にたいする劉備の理解はたいへん深かった。かれの目には馬謖が単なる大風呂敷をひろげる人間にしか見えなかったのである。**古人は早くから大風呂敷の害悪についてよく知っており、**したがって、管子は『言、実より過ぐるべからず、実、名より過ぐるべからず』といった。これは、**けっして大風呂敷をひろげたり、ほらを吹いたりしてはならず、なにごとにつけても慎重な態度をとり、話をより少なくし、仕事をより多くやり、名声をいっそう小さくすべし**と、人びとをいましめているのである」

「漢代の学者王充の見解によると、ゆらい、この道理を無視するものは書生あるいは文人がもっとも多いらしい。王充は『論衡』のなかで、『儒者の言、実を溢美す』と指摘した。かれのいわんとすることは、文人の輩は往々にして大風呂敷をひろげたがるということである。だが実際には、**大風呂敷をひろげたがる人間は他にもいるのであって、けっして文人の輩にかぎったことではない**」

「陸灼は、季孫氏が三千の食客を養える孟嘗君をねたんで、自分にも三千の食客があるとほらを吹いたが、実際に調べられてたちまちボロを出してしまったことを風刺した。陸灼がこの作り話を書いた目的は、ほらを吹いてはならないと人びとに教えるためであった」

「史上、大風呂敷をひろげる実在人物は大勢いたが、こうした作り話の方がいっそう概括性に富んでいる。これらの作り話は**大風呂敷をひろげるいろいろな手口を典型的な物語のなかに集中しているので、よりよく人びとの注目を引き、警戒心を高めることができ、したがってまたよりいっそう教育的意義をもつ**」

「大風呂敷をひろげる話」『燕山夜話』第五集第八十八～九十ページ

もと、一九六二年六月十一日づけ『北京晩報』に掲載

「王安石は宋代の革新派の大政治家であった。かれは多くの革新的な思想をもっていたが、実際の知識と実務の経験に欠けていた。宋代の張耒の『明道雑志』はつぎのようにいっている。『王荆公は宰相になって、大いに天下の水利を論じ、太湖を干せば数万頃の美田をつくれるといった。人びとはみなこの考えを笑った。あるとき、荊公がこのことを客に話していると、同席していた劉貢父学士がさっそくいった。それはやさしいことです。荊公がたずねた。なぜか？　貢父が答えた。そばにもう一つの太湖をつくり水を移せばよいのです。荊公は大笑いした』。王安石の支配の時代には、これに似た笑い話がまだたくさんあるが、このことは王安石の考えの多くが非現実的なものであったことを物語っている。とくに、かれは謙虚でなかったが、これはかれの大きな欠点であったといえよう」

「多く学び、少なく批判せよ」『燕山夜話』第二集八十四ページ

もと、一九六一年四月二日づけ『北京晩報』に掲載

評語　鄧拓はいわゆる大風呂敷、ほら吹きをくりかえし攻撃し、しかも大風呂敷をひろげたがるのは「けっして文人にかぎったことではなく」、「大政治家」にもいるといっている。これは歴史を語っているのだろうか？　そうではない。これはむかしのことをもち出していまを風刺しているのであり、人びとを扇動して党の総路線に反対させ、大躍進

を攻撃させようとしているのである。

わが党は大躍進のなかで労働力を大切にしなかったと中傷している

「早くも春秋戦国時代とその前後の時代に、多くの古代の大政治家たちは労働力を大切にすることの重要性を知っていた。……かれらは自分たちの支配の経験をつうじて、『民力使用』の『限度』、つまり、労働力の消長にかんするいくつかの客観的法則を事実上みつけ出していた」

「『礼記』の『王制篇』には、『民力を年に三日を越えて使ってはならない』とかいてある。元代の学者陳澔(チェンハオ)はこれに注釈をつけて、『民力は城郭、道路、用水路、宮殿、廟宇などの修築につかわれた』とのべている。現代のことばでいえば、それは各種の基本建設につかう労働力のことをさしているのである。昔の人は当時の社会の生産力の水準により、各種の基本建設に使う労働力を、全労働力の一パーセント前後にきめていた。現在からみると、この比率は農業生産を主とする老大国にふさわしいものである」

「晋の国の狐偃(フーイエン)は公子の重耳(チュンアル)に、『一紀の力をたくわえれば、遠大なことがなしうる』と進言した。一紀とは十二年のことである。狐偃が重耳にしたがって衛の国の五鹿(ウールー)を通ったとき、かれは「十二年後に必ずこの土地をものにすることができます」と預言した。……この話から、狐偃のような人間が、古代の歴史的条件のもとにあってすら、力をたくわえることを知っていたということがわかる。紀元前七世紀の人間がこうした道理を知っていたのであるから、二十世紀六十年代に生きるわれわれは当然、いっそうはっきりとこうした道理を知らなくてはならない」

「われわれは昔の人の経験のなかから新しいヒントをつかむべきである」

「労働力を大切にする学説」『燕山夜話』第一集五十六～五十八ページ
もと、一九六一年四月三十日づけ『北京晩報』に掲載

評語　昔の人が「労働力の消長にかんする法則をみつけ出していた」というのはまったくのでたらめである。また、「二十世紀六十年代に生きるわれわれは当然、いっそうはっきりとこうした道理を知らなくてはならない」とか、われわれは「昔の人の経験のなかから新しいヒントをつかむべきである」とかいっているが、これはあきらかにわれわれが大躍進のなかで、基本建設と水利事業のなかで労働力を大切にしなかったと攻撃しているのである。

われわれの社会主義建設事業を「おじゃんになってしまった」といってそしっている

「たしかに、どんな巨額の財産も、さいしょは、小さな額から積みはじめて、築きあげられるものである。これは、白ギツネのわきの下の小さな皮をあつめて一枚の皮ごろもがつくられ、小さな水滴があつまって大河とな

るのと同じ道理である。だからといって、どんな場合でも、たとえば諸君が卵一つもってさえおれば、それでもう一財産できたのだ、ということにはならない。ことは、そんなに簡単でも容易でもないのである」

「明の万暦年間に江盈科（チャンインコー）という小説家がいた。その著書の『雪濤小説』というのに、つぎのような話がのっている。『三度の食事にさえことかく貧乏なひとりの市民がいた。ある日のこと、ニワトリの卵を一つひろって、よろこんで妻にいうには、わが家に財産ができたぞ、と。それはどこにあるのですかと妻がたずねると、その男は卵を示して、これだよ。もっとも、十年またなければ財産にならないがね、と答えた。そこで、かれは自分の計画を妻に話してつぎのようにいった。隣の人にたのんでそこのニワトリにこの卵をかえさせてもらう。ヒナが大きくなったら、そのなかのめんどり一羽をもちかえって、卵を生ませる。そうすれば、一月に十五羽のニワトリが手にはいる。二年たてば、三百羽になる。それを金にかえると十両になる。この十両でめ牛一頭を買い、子を生ませると、三年間に二十五頭の牛が手にはいる。さらに三年たつと、子が子を生んで百五十頭の牛になるだろう。それを金にかえると三百両になる。これを人に貸しつけると、三年間に五百両のもうけになる』と。

この話の後半には、まだいろいろのいきさつがあるのだが、たいした意味もないので省略することにする。ただ一つ、挙げておかねばならないのは、そのご、この金の亡者が、めかけをひとり置くつもりだと、口をすべらしたことである。これをきいて、**かれの妻は『顔色をかえておこり、げんこつを振るって卵をたたきつぶしてしまった』こうして、卵一つの財産が、ぜんぶつぶれてしまったのである。**

諸君は、この話によって多くの問題が解釈できると思わないか。この金の亡者も、財産を築きあげるのには、相当長い時間が必要なことを知っていた。だからこそ、かれは妻に、十年かかってやっと一財産できると話した

のである。これも、みたところ、まったく情理にかなった話である。しかし、かれの計画にはたしかな根拠というものがまるっきりなかった。それはぜんぶ仮設から出発したもので、その一つ一つの手順はみな仮設の前提の上に組みたてられていた。かれは、十年後の状況をえがくのに、**すべて空想でもって現実にとってかえた。**ここに、金の亡者の本来の姿があますところなく現われている。とどのつまり、かれは妻の激怒をかい、かれの妻は**げんこつを振りあげて、かれの財産をみじんに打ちこわしてしまったのである」**

「卵一つの財産」『燕山夜話』第一集、七十六～七十七ページ
もと、一九六一年六月十八日づけ『北京晩報』に掲載

評語　わが党が社会主義建設計画を提出したとき、フルシチョフ修正主義者は、「それにどれほどの真実性があるかは、今後の経過を見ないとわからない」と偉そうな口をきいた。われわれが一時的な困難にみまわれたとき、かれらは、また、われわれの大躍進を「失敗した」、「崩壊した」といって攻撃した。鄧拓は、この随筆のなかで、奇抜な考えだの、「空想でもって現実にとってかえた」だの、「卵一つの財産」が「ぜんぶつぶれてしまった」だのといっている。これも同じように、われわれの大躍進を「失敗した」といって攻撃したものではないか。フルシチョフ修正主義者と調子をあわせた歌ではないか。

プロレタリアート独裁をあくどく攻撃している

「これまでの歴史家も王道と覇道について多くの論評をしている。われわれの現在の観点からすれば、王道と覇道をいったいどうみるべきであろうか？」

「（劉向）は『新序』の『善謀篇』のなかで、『王道は砥石のようなものであって、人情・礼義から出ている』とかいている。かれはまた同書の別なところで、「三代、異なった道に従っても王となり、五覇、異なった法をとっても覇となる」とかいている。みたところ、劉向は王道をたたえ、覇道には賛成しなかったようである。**かれは王道を人情と法律・道徳が結合した結果であるとみていた。これも道理がある。**というのは、『礼記』がすでに『礼、楽、刑、政の四者が円滑に正しく行われれば、王道は完ぺきなものとなる』と書いているからである。こうしてみると、**王道とは、実際には、歴史の一定の時期において、人びとがいっさいの問題を処理するばあい、当時の人情と社会道徳の基準にもとづき、当時の政治と法律制度にそむかない前提条件のもとにとったある種の態度と行動のことをいうのである。**これとは逆に、**いっさいを顧りみず、権勢をかさにきて、横暴にふるまい、あごで指図し、手段を弄して絞りとるのを覇道というのである**」

「われわれの現在の観点から見、われわれの言葉を使っていうと、王道とはいったいなんであろうか、覇道とはいったいなんであろうか？　王道とは、実際から出発したまじめな大衆路線の思想・作風であるということができる。また、覇道とは、鼻息があらくて、主観と独断のつよい、あくまで我を通す思想・作風であるということ

とができる。だが、このような解釈を古人に押しつけることはできず、このような観点で古人を評価することも実際にそくしていない」

「しかし、どうあろうとも、人びとは古代の歴史のなかから、たとえ古代にあっても王道はやはり覇道よりはるかにましであるということを物語る経験と教訓を容易にみつけ出すことができる。『漢書』の作者班固は、秦・漢以前の諸侯が覇を争う情勢をのべたとき、いくつかの個所で覇道を風刺している。たとえば、班固は『晋の文公は覇道を実行しようとして、まず衛の国を討伐して曹伯を捕え、城濮で楚の国をやぶってのちふたたび諸侯の会議を召集した』と書いている。このことからひと目見ただけでも当時、**覇者になろうとしたものがいたるところに敵をつくって、いかに人心をえなかったかということは、すぐにわかる！**」

「王道と覇道」『燕山夜話』第四集十三～十六ページ
もと、一九六二年二月二十五日づけ『北京晩報』に掲載

評語　これはむかしのことをもち出していまを風刺し、プロレタリアート独裁をあくどく攻撃した文章である。鄧拓はわれわれを、「権勢をかさにきて横暴にふるまい」、「人心を得ていない」とののしっている。たずねるが、どのようなものの心を得ていないというのだろうか？　それは地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子の心なのである。プロレタリアート独裁は地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分

子にたいして、「覇道」をとれるだけであって、けっして「仁政」をほどこすことはできない。地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子にたいして「王道」をとったり、「仁政」をほどこしたりすることは革命を裏切り、人民を裏切ることである。

三、罷免された右翼日和見主義分子の冤罪を訴え、かれらの反党的「気骨」をたたえ、かれらの再起を激励している

罷免された戸部尚書「李三才」を弁護している

「北京の歴史上の人物のうち、明代の通州の李三才の事跡が久しい間うずもれていたが、これは地方史を研究するものにとって**残念なことである。**

最近、史学界の数人の友人たちと話しあったとき、たまたま李三才のことが話題になった。家にもどって史料をひもといてみると、李三才にたいする昔の歴史家の評価には大きな問題があることを発見したので、**あらためて研究しなおさなければならない**と思う。

李三才は字を道甫、号を修吾、明の万暦二年に進士になり、『右僉都御史』『鳳陽巡撫』『戸部尚書』などの官職を歴任した。かれは当時の鉱税徴収の方法に反対し、さらに東林党の人びとを積極的に支持した。かれは

『明史』上有名な人物であった。

清のはじめ、張廷玉などが『明史』を編纂したが、その中に『李三才伝』がある。そして、この伝記の終わりの部分には、つぎのような総括的なことばがある。

『三才はすぐれた才能の持主であったが、権謀術数をもちいたり、朝臣をだきこんだりすることに長じ、鳳陽巡撫をつとめた十三年間に、いたるところに交りを結んだ。しかし、清廉を保つことができず、みんなから攻撃された。その後、三才を攻撃した邵輔忠、徐兆魁などは魏忠賢に追随したかどで名を叛逆事件に列せられ、一方、三才をもちあげた顧憲成、鄒元標、趙南星、劉宗周などは、みな卓越した時の名臣であったので、世間では、李三才を賢人とみなした』」

「『明史』には、李三才は『権謀術数をもちいたり、朝臣をだきこんだりすることに長じていた』と書かれている。これはかれをよくいったことばではない。もしこのようにいうならば、**李三才は巧妙な策士、陰謀家ということになる。だが、事実はそうではない。**明代の『神宗実録』という資料によれば、李三才は神宗万暦二十七、八年に、再三にわたって皇帝に鉱税徴収の弊害について上書した。かれは、鉱税徴収に名を借りて、ほしいままに絞りとり、悪の限りを尽す宦官の犯罪行為を大胆にあばきだした。万暦三十、三十一年に、かれはまた一再ならず**鉱税に反対し、さらに、河川のしゅんせつ、用水路の修築、水門の建設によって水害・干ばつをふせぐこと**を上書した。これらの意見はまったくとりあげられなかったばかりか、逆に『俸給を五ヵ月停止』された。このことからしても、どうして『権謀術数をもちいたり、朝臣をだきこんだりすることに長じていた』といえるだろうか？」

「たびたび上書したが、なんの結果も得られなかったので、李三才は官を辞して郷里に帰りたいと申し出た」

「もちろん、そのとき封建制の暗黒政治を攻撃する『東林党の人びと』も現われており、『三才はかれらと親交を結んでいた』そのため、当時の頑迷腐敗勢力は、顧憲成、高攀竜（カオパンロン）ら東林党の人びとをやっきになって攻撃するとともに、李三才をもやっきになって攻撃した。のち、魏忠賢一味は李三才を東林党の人びとと同様に不倶戴天の敵とみなしたが、これはなんら不思議なことではない。

邵輔忠、徐兆魁らをはじめとする例の頑迷腐敗勢力が宦官たちにそそのかされて、李三才をやっきになって攻撃したのも当然のことである。かれらは李三才を『忠義づらをした大悪党、正直づらをした偽善者』とののしり、『汚職、詐欺、陰険、横暴の四大罪状をならべたてた』。李三才がとうとう退官して郷里に帰ったあとですら、かれらは『御料木を盗んで私宅を建てた』などの罪名を李三才にかぶせようとした。これが『明史』にのべられている、かれは『清廉を保つことができなかった』という事実上の根拠なのであろう。しかし李三才はまた再三にわたって、『宦官を派遣して尋問してほしい』、『諸臣が調査してほしい』、『皇帝自ら尋問してほしい』と上書した。かれには、道理があり、自信があったが、万暦の朝廷にはこの事実を徹底的に調べあげる勇気がなかったように思われる。問題の真相はどうか、これはきわめて明白なことではないだろうか？」

「生前と死後のこれらの事実のなかから、李三才は、その一生にまったく欠点がなかったとは考えられないが、しかしとにかく肯定的な歴史上の人物であるといえよう」

「李三才を弁護する」『燕山夜話』第五集一〇二―一〇四ページ

もと、一九六二年三月二十九日づけ『北京晩報』に掲載

評語　李三才は歴史上とるにたらない人間であって、かれは農民蜂起に弾圧をくわえた人殺しである。ところが鄧拓は、李三才は民のために訴え、民のために利益になることをおこなった立派な官吏であるといい、「罷免」されたかれを弁護し、そのうえ、かれには「道理があり、自信があった」といっている。なぜだろうか？　それは李三才が海瑞のような人間であり、李三才を弁護することによって、実際には右翼日和見主義分子の冤罪を訴えているのであることは一見してわかる。

「でっちあげられた罪名で告発」されて免官となってから、満腔の恨みをいだいて、「根性をいれかえなかった」鄭板橋をほめたたえ、人びとに「みずから主人公としてふるまい、他人の奴隷とならなかった」かれの人柄に学ぶよう呼びかけている

「歌曲に有名な揚州に怪名をはせ、
蘭と竹を友として読書に日を送った。
一管の画筆を春秋の筆とし、
十首の歌に天地の情をのべた。

官帽を脱ぎすてて、本来の姿にかえり、
水墨を日ごろの業とした。
板橋はいまはいないが、虹橋はまだ残っている、
緑なす無数の山々は、ことの外あかるい。

これは、わたしが、一昨年（つまり一九六一年）揚州を訪れたとき、清朝の画家であり詩人であった鄭板橋（チョンパンチャオ）を追憶して作った律詩である。……あすは、かれの誕生日にあたるので、この機会を利用して、この作家の再評価をこころみるのも、あながち無意義であるまい」

「かれは、乾隆五年に山東省范（ファン）県の知事に任命され、同十一年には濰（ウェイ）県に転任を命ぜられてそこの知事となった。**思いがけないことに、山東は年々自然災害にみまわれ、板橋は熱心に救済金をつのった。それが土地の権力家や大商人たちのうらみを買うところとなり、『汚職』の罪名をきせられて免官となった**」

「鄭板橋は、山東での災害救済に大きな功績があった。**かれは、完全に人民のがわにたち、被災者大衆の利益をはかった。それが封建官僚や土地の勢力家・地主階級の激怒をかうことになったのである。**……かれらは、ぐるになって罪名をでっちあげ、救済に名を借りて汚職をはたらいたといって、鄭板橋を告発した。清朝の腐敗した支配階級は、この事件の処理にあたって、土地の勢力家や地主たちのでっちあげた告発をそのまま信用した。板橋はこのありさまを見て憤慨し、辞職を申しでたところ、上司はこれさいわいとばかりに許可した。こうして、乾隆十七年の晩秋から初冬にかけてのころ、鄭板橋はついに**免官となった**のである」

「**免官になってから**七十三歳で死去するまでのあいだに、『板橋体』といわれるかれの思想と作風は、ぜんたいとして、ますます鮮明になっていった。それは、まず、かれの詩や詞のなかにあらわれた。ここでは、その証拠としてかれの〈沁園春〉の後段の一曲だけをあげておこう。この詞の題は『恨（うらみ）』のただ一字である。

花もわが心をしらず、月を眺めてもたいくつである、酒をのんでも酔いがまわらない。桃のわか木をきりたおして庭の風情（ふぜい）をころし、オウムを煮てあつものに味わいをそえたい。すずりをくだき、書を焼き、琴をたたきこわし、絵をさき、文章をことごとくやぶりすててわが名をまっ殺したい。……**うらぶれながらも生来の根性をいれかえることはできない。そまつな帽子と衣服をまとったわが身は、やせ衰えるばかりだ。**草ぶきの家のまわりには秋草がしげり、さびれた小道は年ごとに荒れていく。破れ窓から小さめがふりこみ、夜ごとにともす燈火の光りはうらさびしい。**天は、いまなおわが口を封じて、長嘆息するのを許さぬ**というのか。**気もくるわんばかりの思いに、黒ぎぬ百枚をとりだして画筆をふるい、うらさびしい胸の思いをつぶさにうつしだしたい**」

「わたしは、ここで……ついでに、今まで発表されたことのない板橋の絵を紹介しておきたい。それは〈深山蘭竹図〉で、おそらく板橋が山東の范県にいたころの作であろう。その絵につぎの一首の詩が題してある。

深山絶壁にはひっそりと蘭の花が咲いているのが見える。まばらな竹の葉は風にそよぎ、もの淋しい風情である。宮仕えなんか早くやめてしまって、ここに来て枕を高くしてのんびり休息できたらどんなに楽しいことだろう」

「あきらかに、これは、かれが知事の職にありながら、すっかり宮仕えにいや気をさしていたころの作である。画意と詩情とが完全に一致している。……この画境と当時この画家が経験した役人生活とを対照してみれば、**この画の中心思想はひじょうにはっきりするではないか**」

「わたしの知るかぎりでは、いまなお、まじめに『板橋体』を学んでいる人がいる。しかし、『板橋体』を学ぶにあたっていちばん大切なことは、『板橋体』のたましいをつかむことである、とわたしは考える。では、『板橋体』のたましいとはなにか。わたしの考えでは、**あらゆる方面でみずから主人公としてふるまい、他人の奴隷とならないことである！**」

「板橋はこういったことがある。『およそ文章を書くものは独立人として文章を書くべきで、奴隷の文章を書くべきでない』と。この一句はひじょうに大切である。かれ自身も徹底的にこの思想を実行しようとして、特別の印章をつくり、『鄭は東道の主なり』の文字をそれに刻んだ。その意味は、なにごとをするにも、**つねに主人公たることをもってみずから任じ、自分で道をきりひらく、ということである**」

「鄭板橋と『板橋体』」　一九六三年十一月二十一日づけ『光明日報』

評語　なんとうまく呼吸があっていることだろう。呉晗の《海瑞の免官》が世にでたあと、鄧拓もにわかに懐古の念にかられて、免官となった鄭板橋を「追憶」するようになった。まず、一九六一年に詩をつくり、つづいて一九六三年には一文をあらわして、「鄭板橋」の免官が無実の罪によることをむきになって訴えた。あんなに憤慨し、あんなにいきりたって！　この文章を呉晗の《海瑞の免官》と比較しただけで、読者は両者がまったく同工異曲なことに気づかれるだろう。どちらも、免官になった右翼日和見主義分子のために、不平を鳴らしているのである！

鄧拓は、画竜点睛の筆をふるって、「板橋体」のたましいは、「みずから主人公としてふるまい、他人の奴隷にならない」ことだと指摘した。そして、この「たましい」をつかんでまじめに学び、「自分で道をきりひらく」よう人びとに呼びかけた。なんという悪意と毒気にみちたことばだろう！　鄧拓が人びとに呼びかけているのは、党の指導に反対せよということではないのか。社会主義の光明にみちた大道が開けているのに、かれは人びとに「自分で道をきりひらけ」と呼びかけているのである。かれのいう道とは、資本主義復活の道でなくてなんだろう？

米万鐘は、「清廉な官吏で、民事・刑事に関心をよせ」しばしば時事を批判し、中・下層人民から大きな称賛をうけたが、そのために官を免ぜられる羽目におちいったといって、米万鐘をほめたたえている

「米万鐘（ミーワンチュン）はひじょうに学問もあり、気骨もある人であった。たしかに、かれの平素の人となりには、称賛にあたいするたくさんの長所があった。かれは、明の隆慶四年に生まれ……二十五歳になったばかりで進士の試験に及第し……その翌年、江寧（チャンニン）の知事に任命されたが、しばらくして、江西（チャンシー）の按察使の職に転じた。つたえられるところによると、米万鐘は、清廉な官吏で、民事・刑事や文教事業に関心をよせ、行くささざきで中・下層人民や文人たちから大きな称賛をうけた」

「米万鐘は、日ごろ魏忠賢一派をけいべつしていたばかりか、しばしば時事を批判したので、魏忠賢にとっては目の上のこぶであった。とりわけ、魏の手下であった倪文煥（ニーウエンホワン）は善人をおとしいれることに熱中していたので、当時、かれの手にかかって災いをうけたものは数十人にたっした。重いものは拷問にかけられて殺され、かるいものは官職を免ぜられた。米万鐘も官職剝奪の処分をうけた」

「かれは一枚の白絹の上に〈爛柯山（ランコーシャン）〉と題する七言絶句一首をしたためたが、生き生きとして力のこもった筆勢で、すこしも御用文士風の臭みがなかった。その詩にいう。『日月の経過することのなんとあわただしいことか。仙人の年にかぎりがないのがうらやましい。かりに、一瞬間に時代がかわるとしても、やはり人間の世界は仙人のすむ洞窟（どうくつ）の世界にくらべてより長く続く』と。この詩は、いったい、なにを言おうとしているのだろう？明らかに、明の政界の風雲（くもゆき）の予測できない変化にたいして、かれの心境を反映したものである」

「宛平県の大・小米」『燕山夜話』第三集三十九～四十一ページ
もと、一九六一年十一月九日づけ『北京晩報』に掲載

評語　この文章は、米万鐘の亡霊をもちだして、またもや、右翼日和見主義分子のために、かれらの無実を訴えている。

「李鱓」が免官になったことについて、不平を鳴らしている

「李鱓（リーシャン）はひじょうに不遇であった。鄭板橋が、李鱓におくった詩のなかで、『官をやめされること二度、官位をさげられること一度、鏡にうつる白髪の乱れに、君の心寒からん』とのべているとおりである。当時、李鱓は、清朝画院の古画模写係りの画師たちから排斥されて画院をさり、山東の滕（トン）県にいってしばらく知事をしていた。しかし、そこでも、権力をにぎっていた一部の高官たちに憎まれて職をとかれた。それ以来、かれはおちぶれて揚州にうつり住み、絵を売って生計をたて、いわゆる揚州八怪のひとりとなった」

「あらためて、かれ自らの題した詩を見ると、この絵の深い意味がいっそうよくわかる。この詩には、はっき

りこう書いてある。

処士（宮仕えしないもの）の住む林のほとりに、黄葉がさらさら音をたてて舞いおちている。白い霜のおりたのを見ても、寒さが早くやってきたことを恐れはしない。ニワトリを絵にえがいて叫ばせ、人間の良心を目ざめさせて善行をおこなわせたい」

「この詩は、絵の意味を明らかにしているばかりか、李鮮の当時の境遇と不平不満の情とをよくあらわしている」

「李鮮とその絵について」　一九六一年二月十四日づけ『光明日報』

評語　またしても免官の話！　一九六一年から一九六三年までの間に、鄧拓は、免官となった人たちのために、四度も不平を鳴らし、免官となっても屈しなかったかれらの「反抗精神」をほめたたえた。まったく、「脳みそをしぼって考えた」ものである！

四、わが党にはやく引きさがって「休め」、と気違いのようにわめきたてている

わが党に「なにもいうな」、なにもするな、すべて鄧拓らの「指導」にまかせよ！　と要求している

「わたしは、好んで偉大な空言を口にする友人たちに、多く読め、多く考えよ、しゃべるのをへらせ、しゃべる必要のあるときには休め、きみと他人の時間と精力をむだにするな、と忠告したい」

「『偉大な空言』」『前線』一九六二年第二十一号

「健忘症患者の症状が……もっともひどくなったときには、どのような状態になるだろうか。おそらく、気違いになるか、バカになるかのどちらかだろう」

「もしこの二つの極端な現象のいずれかが現われたならば、患者はすぐさま十分に休む必要があり、なにもしゃべらず、なにもしてはいけない。無理にしゃべったり、やったりすれば、大変なことになる」「名医の指示をあおぎ、患者の家族が決定を下してはならない。ことに健忘症患者本人はみだりにああだこうだと口出ししてはならない」

「『健忘症』の専門治療」『前線』一九六二年第十四号

「四十雀はホラがばれれば、恥ずかしそうに飛んでいってしまえばよいのであるから幸せである。しかし、他の場合には、ホラがばれれば、ペテンにかかった人びとはホラ吹きのペテン師を決してやすやすと放免しはしない、ということを知っておくべきである」

「外国の寓話ふたつ」『夜山燕話』第五集九十三ページ
もと、一九六一年十一月二十六日づけ『北京晩報』に掲載

「賈島（チャタオ）は当時の范陽郡（ファンヤン）の人である。……この一帯は春秋戦国の時代には、幽・燕に属しており、英雄豪傑が侠気を歌によって表わすのが伝統的な風潮となっていた。まさに賈島が〈剣客〉という五言絶句のなかで、『十年一剣を磨き、霜刃未だ試さず。今日君に示す、誰か不平あらんや？』と書いたとおりである。この詩人が、自分の気持ちを詩に託していることは明らかである」

「賈島の創作態度」『燕山夜話』第一集十六ページ
もと、一九六一年六月十八日づけ『北京晩報』に掲載

評語　このいくつかの資料で、われわれは『夜話』の凶悪な正体をいっそうはっきりと見てとった。鄧拓は、わが党と社会主義をののしるだけにとどまらず、根底からくつがえそうとしたのである。「健忘症患者」は「すぐさま十分に休む必要がある」といっているが、これは共産党を引きずりおろそうと妄想したことではないだろうか？

「書生流の空論家」ではなく、「権力の座にいた悪党ども」に極力反抗した「熱血漢」である

「東林党の人びとは亀山の教えを受けついで講学し、
天地間の事物の一つ一つに関心をよせた。
かれらを、書生流の空論家と言うべきではない。
首をはねられて大地を血でそめたかれらだ」
「権力の座にいた悪党どもに極力反抗して、志をまげなかった。
東林党の人びとこそは一代の熱血漢である！
首領の攀竜の節操は千載に光りをはなち、
辞世の一言一句は人びとを感動させずにはおかない」

「太湖をうたう」　一九六〇年九月七日づけ『光明日報』

評語　鄧拓はここ数年来、さかんに「東林党」について語っている。とりわけ、東林書院の柱にかけてあった対聯を紹介して、東林党の人びとの読書、講学には「かれらの政治的目的があった」とか、かれらにはひじょうに「気骨」があったなどといっている。ところで、右にかかげたかれの二首の詩は、「権力の座にいた悪党どもに極力反抗して、志をまげなかった」かれらの反抗精神をうたっているが、この詩も、政治的目的をもっていることは明らかである。鄧拓一味は、反党・反社会主義活動をおこなうにあたって、東

林党をかつぎだし、さかんに東林党の叛逆精神をうたうことによって、仲間の士気を鼓舞しようとしているのだ。

五、『燕山夜話』は「知識」の紹介に名をかりて、党と社会主義に反対している

「ハエ、トコジラミといったつまらぬものからはじめて、最後には政局にもっていく」これは、党と社会主義に反対する鄧拓の手口の一つである

「『夜話』は新聞に連載されていながら、新聞のことにはほとんどふれていない。これはいったいどういうわけか？　きみはこの方面のことに興味がないのか？

ある知人がわたしをこのように非難してきたが、**わたしは唖然として失笑を禁じえなかった。これはいったいどういったらよいのか。**よろしい、いま、都合のよいことに、読者から林白水（リンパイシュイ）の死について話すように手紙がきており、これでともかく新聞のことについて話す機会ができたわけである」

「辛亥革命の後、林白水は北京で『新社会日報』を創刊した。そして文章を発表し、『中国の今日の政体は民主主義が好ましいのは当然である。しかし、封建残余勢力はまだ少しも手をふれられずにあり、それを根こそぎにしようとすれば十五年の努力が必要である』といった。かれがこの文章を書いたときから、一九二五―一九二七年の大革命まで、ちょうど十五年前後になるので、これは林白水の『予見』であるといえるだろうとある人がいった。ところで、**話によると、かれの文章はしばしば『手あたり次第にテーマをとってきて』『ハエ、トコジラミのようなつまらぬものからはじめて、最後には政局にもっていき』『ことばに憤りと諧謔（かいぎゃく）を含んでいた』ので、とりわけ一部の為政者の不満をまねいたそうである。**『新社会日報』は一度強制的に停刊させられたが、のちに復刊したとき、かれは、『今後、新社会日報の新をのぞくが、これは首を落とすのと同じであり、これによって自身を処罰したことを示す』といった。これが『新社会日報』が『社会日報』にかわったいきさつである」

「林白水の死」『燕山夜話』第五集一〇五～一〇七ページ
もと、一九六二年八月二十六日づけ『北京晩報』に掲載

評語　長期にわたって新聞関係の仕事に従事してきた鄧拓が、なぜ新聞のことをもちだされて、「唖然として失笑を禁じえなかった」のだろうか？　これは一応調べてみる必要がある。そして、調べてみるとすぐに、かれは新聞関係の仕事に従事していたとき、批判されたことがあったので党に恨みをいだいているということがわかる。

話によれば、辛亥革命の後、北京で創刊されたある新聞の主筆である林白水は、その書く文章が、しばしば「手あたり次第にテーマをとってきて」「ハエ、トコジラミといったつまらぬものからはじめて、最後には政局にもっていった」ということである。これは鄧拓の自白ではないだろうか？　鄧拓は「苦心さんたんして」文章を書いているが、もし読者がわからなかったらどうするのか？　だからこそ、かれは死人の口をかりて、かれのいっているのは瓦のかけらやみつばちのたぐいであるが、「最後には政局にもっていく」ということを表明しておく必要があるのである。これがカギである。われわれはこのカギを使って、かれの『燕山夜話』を「開け」なければならない。

『夜話』は、ほとんどが「一つのことばに二つの意味を含んでおり」「政治的目的」をもっている

「『風の音、雨の音、書を読む声、すべての声に耳を傾け、
家の事、国の事、天下の事、なにごとにも心をよせる』
これは、明代の東林党の指導者である顧憲成（クーシェンチェン）がつくった対聯である」
「なぜ、とつぜんこの対聯を思いだしたのであろうか？　なん人かの友人たちと話をしているとき、昔の人びとの読書は、そのほとんどが政治的目的をもっておらず、みな読書のための読書であり、書物を読んでも実際

と結びつけて運用しなかった、といっていたので、このような認識が事実と合致していないことを証明するために、この対聯をもちだしたのであり、また、この対聯を知っている人がごく少数なので、ぜひとも紹介しておく必要があったからである。

上の句の意味は、書院の環境が読書に専念するのに適していることをいっている。この二十一の文字は、自然の風雨の音と読者の声が織りなす情景を生き生きと描写しており、あたかも当時の東林書院のなかに身を置き、耳のあたりに朗読と講学の声を、神の吹く簫とともに聞くかのようである。

下の句の意味は、書院で読書をするものはみな政治に関心をもたなければならないことをいっている。この二十一の文字は、当時の東林党の人びとの政治上の抱負を十分にいい表わしている。かれらは、ただ自分の家の事に心をよせるだけではなく、国家の大事、全世界の事にも心をよせなければならないといっている」

「上の句と下の句をつなぎあわせると、その意味がいっそう明確になる。つまり、読書に力を入れるとともに、政治にも関心をよせ、両者をしっかりと結びつけなければならないということである。しかも、**上の句の風の音、雨の音は、二つの意味を含んでいるとも理解できる。すなわち自然の風雨と政治の風雨の双方を指しているのである。**したがって、この対聯の意味するところは**まことに深いもの**がある。

われわれの現在の目からみると、**東林党の人びとの読書と講学が、かれらの政治的目的をもっていたことはあきらかである**」

「読書に努力すると同時に、政治にも関心をよせなければならない、この道理はますます明らかになってきた。昔の人でさえこの道理を知っており、この道理を広めていたのに、われわれが昔の人におよばず、この道理

がわからないなどということはないだろう。どうあろうとも、われわれは昔の人よりいっそう十分に、いっそう深く、いっそう徹底的に知るべきである！」

「なにごとにも心をよせる」『燕山夜話』第二集六十～六十二ページ
もと、一九六一年十月八日づけ『北京晩報』に掲載

評語 鄧拓は、「東林党の人びとの読書と講学が、かれらの政治的目的をもっていたことはあきらかである」、東林党の人びとのいう風の音、雨の音には「二つの意味を含んでおり」「自然の風雨と政治の風雨の双方を指している」、そして、それらが意味するところは「まことに深いものがある」、とわれわれにいっている。これは鄧拓の自白である。

「漫画の手法」によって、「社会の現実にたいする不満の感情」を表わすべきであるとあおりたてている

「昔の人は絵画を武器として、悪人・悪事をあばきだし、善人・善事をたたえることを知っていた。したがって、善悪の対比を題材にした絵画は、中国の昔の漫画の表現形式の一つであると考えることができる」

「だが、一般的にいって、歴代の画家たちは、当時の社会の現実にたいして分析や批判を加えることができな

かったばかりでなく、その弊害を大胆にあばきだす勇気もなかった。そこで、**一部の画家は特別に含蓄のある表現形式によって、当時の社会の現実にたいするかれらの不満の感情を表わしたのである**」

「もっとも注目すべき漫画は、やはり揚州八怪（ヤンチョウ）の作品であろう。事実上、これらの画家は**みなその当時、現実に不満を抱いていた南北各地の文人であって、かれらは世俗を憤り嫌い、腹いっぱいの不平をもっており、時流にあわなかった**。だから、当時の人びとはかれらを「怪人」と呼んでいた。かれら自身もよろこんで「怪人」をもって自任していた。かれらがこのような思想感情に左右されて画いたものに、「怪奇」なものがただよっていたのは当然である。ここで、羅両峰（ロリヤンフォン）の作品を例にあげてみることにしよう。……かれは平素鬼をもっとも好んで画き、これで有名になっていた。人びとはみな、かれを有名にした作品が『鬼趣図』であることを知っているので、これが昔の漫画の典型であるといえよう」

「（われわれは）、かれの**鬼にたいする風刺が、実際には人間にたいする風刺である**ことを知っている。ところで、当時の社会では、もし、画家が直接に生きている人間を風刺したならば**必ず禍をまねいた**。だが、亡者を風刺するだけならば、なんらの危険もなかった。まさにこれらの実際上の考慮から、かれは鬼を風刺の対象にする漫画の手法を選んだのである」

「昔の漫画」『燕山夜話』第三集五一～五三ページ
もと、一九六一年十一月二日づけ『北京晩報』に掲載

評語　ここではっきりとのべられているように、「鬼にたいする風刺」は、「人間にたいする風刺」であり、「漫画の手法」によって社会の現実にたいする「不満の感情」をぶちまけるのである。『夜話』ももちろん同様である。

三十六計逃ぐるにしかず、形勢不利と見て、しばらく退却する

「たまたま、『三十六計』と題する謄写版刷りの小冊子を見ることができた」

「その小冊子は、三十六計の名を列挙しているばかりか、古代の兵法家が実際に応用した例をあげて、それを証明している。**この点にこの小冊子の値うちがある**」

「では、昔の人で、三十六計について語ったものがいるだろうか。さいしょにそれを言いだしたのはだれだろう？　わたしの知るかぎりでは……おそらく、『南斉書』の『王敬則伝』がいちばん古い」

「『南斉書』第二十六巻『王敬則伝』のなかに、つぎのようなくだりがある。

『時に、帝は病んですでに重体におちいっていた。突然、敬則が東方で叛乱をおこしたので、朝廷はおおいに恐れおののいた。死後に東昏侯（東のおろかな侯）とよばれた皇太子は、そのとき東宮にいたが……敬則がやってきたとの知らせをうけて、いそいで荷物をまとめて逃げようとした。このことを、敬則に知らせるものがあったが、敬則がいうには、檀公の三十六計は逃げることを上策としている。さっさと逃げることだ、あの親子にはそれ以外の策がないのだから、と』

同じく『南史』第四十五巻『王敬則伝』にも、『……さっさと逃げることだ、あの親子にはこれ以外の策がないのだから』の一句のあとに、なお『思うに、これは、檀道済が魏とたたかうのを避けたことを皮肉ったことばである』の一句がつけ加えられている」

「檀道済の生きていた時代は、王敬則よりいくらか早い。かれは、南朝の宋の武帝劉裕の建国をたすけた武将で、宋の文帝劉義隆が即位したのち、位を進められて武陵郡公に封ぜられた。征南大将軍の称号をさずけられて、軍を率いて魏をうち、たたかうこと三十余回、みな勝ちいくさであった。のち、糧まつの補給がつづかなくなったため、たくみに策略をめぐらして兵を引きあげた」

「『南史』第十五巻『檀道済伝』は、当時のもようをもっと詳しく述べている。

『道済は、征討軍を統率して、北方をせめ落とし、転戦して済水のほとりに到着した。魏軍は優勢であったが、ついにかれは滑台をせめ落とした。道済は魏軍とたたかいをまじえること三十余回、多くは勝ちいくさであった。歴城に到着したが、物資の補給が絶えたので引きかえすことになった。そのとき、魏軍にくだった兵士がみな、味方の糧食のつきたことを敵に知らせたので、宋軍の兵士のあいだに不安と恐怖がひろがり、士気がふるわなかった。そこで、道済は、夜中、兵士に大きな声をださせて砂を量らせ、余ったわずかばかりの米をその上にまいておいた。翌朝、魏軍は、宋軍の糧食はまだ余っているといって、追撃することをしなかった。そして、さきに降伏した宋の兵士たちを、うそをついたといって斬殺し、そのことを軍中に触れ知らせた。当時、道済側では兵士の数もすくなく力も弱まっていたので、全軍が大きな恐怖にとらわれていた。そこで、道済は、兵士ぜんぶによろいを着けさせ、自分は車に乗って馬を御しながら、しずしずと陣地のそとにでた。魏軍は敵の伏兵の

あることを恐れ、思いきって近づこうとしないで引きかえした。道済は河南を征服できなかったが、全軍無傷で帰国することができ、かれの雄名は天下にとどろいた。魏のかれを恐れることは、たいへんなものであった』

右のような状況から見ると、檀道済が当時つかった計略は、**たんに『逃ぐるにしかず』だけではなかった。もし、他の計略をつかわなかったら、かれは逃げようにも逃げられなかったろう。かれは、兵がいると見せかけて敵をまどわす疑兵の計や、反間策などいくつかの計略を組みあわせてつかったので、魏軍は思いきって追いうちをかけようとせず、それでやっと無事に退却することができたのである。**王敬則が、檀道済を皮肉って魏とたたかうのをさけたといったのは、今から考えると、じつは王敬則こそが策のない男であったことを証明している。

上に引用した資料を総合、判断して、われわれは、『檀公の三十六計は逃げることを上策としている』の一句がなにを意味するかを、理解することができた。だとすれば、**これを引き伸ばし、発展させて編みだしたいわゆる三十六計が、けっきょく、どういうものであるかも、ひじょうにはっきりしているではないか**」

「三十六計」『燕山夜話』第五集、八十四～八十七ページ
もと、一九六二年九月二日づけ『北京晩報』に掲載

評語　「三十六計」は『燕山夜話』の最後の文章である。一九六二年九月二日に発表された。党中央委員会第十回総会の召集がまじかに迫っていた時である。形勢不利と見た鄧拓は、「三十六計、逃ぐるにしかず」として、退却の手はずをととのえた。ただし、安全に退却するためには、あたまを働かせ、策略をもちいる必要があった。もし、「逃ぐるにしかず」の一手以外に、その他の計略をもちいないなら、「逃げようにも逃げられない」そこで、かれは三十六計の名を列挙して、仲間たちの参考に供したのである。『夜話』はしばらく「馬をおりる」ことになったが、実力を保存して再起をはかるために、〈三家村〉の殺人宿だけは平常どおり営業をつづけた。しかし、三十六計をつかおうと七十二計をつかおうと、とうていのがれうるものではない。

（もと、一九六五年五月八日づけ『解放軍報』と『光明日報』に掲載）

『前線』と『北京日報』のブルジョア的立場を評す

戚本禹

今年の四月十六日、『北京日報』は三ページにおよぶ特大の紙面と全段ぬきのゴシックの大見出しを使って、〈三家村〉と『燕山夜話』に関する「批判」の資料を掲載した。中国共産党北京市委員会の『前線』誌と『北京日報』は、この資料のために「編集者のことば」をつけ加えた。当日発行された『北京晩報』も三ページ余の紙面をさいて、これらの資料を抜粋して載せた。その勢いのすさまじさは、これらの新聞・雑誌が創刊されていらい、まれにみるものであった。

『前線』『北京日報』『北京晩報』は、これまで大量の反党・反社会主義の毒草を発表してきたが、現在、もし、これら多くの毒草にたいしてまじめに批判をおこない、さらに、自分たちの誤りにたいして真剣に自己批判をおこなうことができるならば、それは必要なことであるし、また、当然やらなければならないことでもある。だが、『前線』と『北京日報』のいまのやり方は、毒草をまじめに批判しているのだろうか？　自己批判を真剣にやっているのだろうか？　いや、そうではない。

きみたちは呉晗を批判したことがあるだろうか？

ない。

一九五九年、呉晗が海瑞（ハイルイ）にことよせて党と社会主義に気違いじみた攻撃をかけてから、一九六五年十一月十日、姚文元（ヤオウエンユウン）同志が「新作歴史劇《海瑞の免官》を評す」という論文を発表するまで、六年余の年月があった。この六年余の間に、『前線』『北京日報』『北京晩報』は、呉晗をひと言も暴露したことがなかった。逆に、『北京日報』『北京晩報』は、この期間、さかんに文章を発表して、呉晗と呉晗のつくりあげた反党・反社会主義の「海瑞」をさかんにもちあげた。「兄弟」たちのこれらの「よく呼吸のあった」名文は、《海瑞の免官》をもちあげたすべての文章のなかでも、もっとも拙劣な、もっとも悪質なものであった。

姚文元同志が呉晗の問題をとりあげたのち、きみたちは自分の態度を変えただろうか？　やはり変えなかった。二十日間ほどの間に、きみたちは、姚文元同志のこれほど重要な戦闘的文章を転載も紹介もせず、逆に、上海の同志に、「きみたちが姚文元の文章を発表したのはどのような背景があってのことか？　なぜ事前に知らせなかったのか？　きみたちの党派性はどこへいってしまったのか？」と詰問したのである。

どのような背景？　背景はプロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争であり、毛沢東同志がつねづねわれわれに教えている社会主義社会における階級と階級矛盾にかんする学説であり、きみたちの新聞にも掲載されたことのある、党の第八期中央委員会第十回総会の公報のなかの、プロレタリア思想をおこしブルジョア思想をほろぼす階級闘争を全国的にくりひろげることについての決定である。階級闘争をやるのにもきみたちの許可を経なければならないというのか？　きみたちの許可を経なければ党派性がないというのか？　ひじょうにはっきりしているように、きみたちの必要とする党派性は、プロレタリアートの党派性ではなく、ブルジョアジーの党派

性なのである。

一九六五年十一月二十九日、『北京日報』は大衆の圧力によって、やむを得ず姚文元同志の文章を転載した。このとき、きみたちの態度は変わっただろうか？やはり変わらなかった。『解放軍報』が旗じるし鮮明な「編集者のことば」を発表して、呉晗の《海瑞の免官》は大毒草であると正しく指摘した。ところが、『北京日報』の「編集者のことば」は、《海瑞の免官》について是とも非ともいわず、これは「比較的影響の大きい劇」であり、ここ数年らい、人びとは「異った意見をもっている」が、「異った意見があれば討論をおこなうべきである」といっただけであった。実際は、きみたちは呉晗を支持し、姚文元同志の文章に反対したのである。『前線』と『北京晩報』はどちらも姚文元同志の文章を転載しなかったが、『北京日報』が転載したのは、ニセの公正なポーズをよそおいながら、実際にはえこひいきするきみたちの態度をおおいかくそうとしたものである。

一九六五年十二月十二日、『前線』と『北京日報』は、とつぜん、よく目立つ位置に、目を引くような見出しで、「《海瑞の免官》から〈道徳継承論〉におよぶ」と題する向陽生の名で書かれた文章を発表した。いかにもきみたちは自分の誤りを改めて、社会主義文化革命の前線に立ったかのようであった。

これはいったいどうしたことなのか？

実は、これは文化革命反対の調べを奏でる文章だったのである。この文章は、「すこしばかり悪態をついて大いに手助けする」手口で呉晗を保護している。文章の主なねらいは、呉晗の《海瑞の免官》の「指導思想」なるものを「道徳継承」の問題であるといいくるめることにあった。反党・反社会主義の重大な政治問題が、向陽生の文章では、いわゆる「純学術」的問題に変わってしまっている。

この文章の筆者はまだ、「真理の前ではだれも平等だ」というブルジョアジーのスローガンをかかげて呉晗を弁護している。実際には、きみたちはこれまでも一貫してブルジョアジーの立場に立ち、呉晗のようなブルジョアジーの代表者をかばい、プロレタリアートの革命家を抑えつけてきたのである。きみたちは、反動的なものにたいしてはこれまで一貫して青信号をつけっぱなしにしておいて、反党・反社会主義の毒草を大量にとびださせておきながら、毒草を批判する文章にたいしてはそれをすべてにぎりつぶして発表を許さなかった。これこそ正真正銘のブルジョア的「自由化」であり、プロレタリアートにたいする独裁であって、どこに平等などというようなものがあるだろうか？

向陽生は文章の終わりで、みんなに「道徳継承」の問題について討論をすすめるようもっともらしく要求し、それによって、呉晗の《海瑞の免官》問題の討論の基調をきめ、呉晗の《海瑞の免官》にたいする批判をするどい政治問題から、「純学術」的問題へそらそうとした。のちになって人びとは、向陽生（シヤンヤンション）が、呉晗といっしょになって反党文章を書いた鄧拓であることを知った。さらに重大なことは、一九六五年十二月二日、鄧拓が『北京日報』のある会議の席上で、「いまのところ、《海瑞の免官》が大毒草であるとは確認されていない」と公然と宣言するとともに、姚文元同志の文章にも呉晗の文章と同様に誤りがあるといった。

それから間もなく、すなわち一九六五年十二月二十七日に、『北京日報』は、呉晗の「《海瑞の免官》にかんする自己批判」を発表したが、これはニセの自己批判であって、本当は攻撃を加える文章であった。『北京日報』はこの文章の発表に際して、なんらの編集者のことばもつけ加えなければ、なんらの批判もしなかったが、これは事実上、呉晗が自己批判の形で、自分を批判した同志を反撃するのを支持したことである。注目すべきこ

とは、呉晗が向陽生と暗黙の了承のうえ、この文章のなかで、あなたの批判のおかげで「わたしは誤りを知り、自分の観点を改めた」と向陽生にいったことである。呉晗は反攻の任務を果たすと、向陽生がきめた基調にしたがって、『前線』と『北京日報』に「道徳継承」の問題にかんする自己批判なるものを発表し、自分の誤りの「主要な点」は、「道徳継承」の問題にあると、喜んでみとめた。二人はしっかりと抱きあい、互いに唱和しあいながら猿芝居を演じたのである。

一つの文章では足りず、基調をきめることができなかった。そこで、きみたちは同じ性質の文章をつぎつぎと発表し、呉晗の反党・反社会主義の政治問題を、「純学術」的問題へやっきとなってそらそうとした。今年の一月八日づけ『北京日報』に発表された「呉晗同志の歴史観を評す」という李東石（リートンシィ）（すなわち北京市委員会宣伝部長李琪（リーチー））の文章は、この目的のために出されたものである。この文章は、呉晗の《海瑞の免官》の「指導」思想を、歴史的人物を評価する観点であるといいくるめている。同じ《海瑞の免官》を、「道徳継承論」の産物であるといったり、歴史的人物を評価する観点の産物であるといったりしているが、それが反党・反社会主義の産物であるとは、どうしてもいおうとはしない。

人びとの目が光っているところで、不正を働き、ごまかしをやろうとしても、それはできない。『前線』と『北京日報』の呉晗にたいするニセの暴露と真の支持、ニセの批判と真の庇護、ニセの闘争と真の保護の手口は、すぐに人びとに見破られた。少なからぬ新聞・雑誌が呉晗の反党・反社会主義を摘発する文章を発表した。とくに今年の四月以降、呉晗の反党・反社会主義の犯罪行為がますます多くの人びとに知られるようになり、反共・反人民・反革命の知識人の正体がますますはっきりと暴露されるようになった。「王手」の危険な局面が、

呉晗を支持し、かばう『前線』『北京日報』『北京晩報』のまえにあらわれた。こうなってやっときみたちはしぶしぶ出てきて、「呉晗は≪海瑞、皇帝をののしる≫、≪海瑞の免官≫という二本の大毒草の作者である」といい、呉晗が以前『前線』に発表した≪趙括と馬謖≫をあらためて発表し、これでいい加減に責を逃れ、読者をあざむこうとした。これがきみたちの呉晗にたいする「批判」なのである。人びとはたずねざるを得ない。きみたちはなぜわかりきったことを重要な秘密として紹介しながら、呉晗が胡適(フーシィ)の衣鉢を忠実に継ぎ、甘んじてアメリカの奴隷となり、国民党反動派のために策を弄した各種の犯罪活動についてはひと言もふれようとしなかったのか？

きみたちは廖沫沙を批判したことがあるか？

ない。

廖沫沙（前北京市委員会統一戦線工作部長）は、かつて毒をふくんだことばを「名を変えてやみうちの失にぬりつけ」①、文化革命の主将だった魯迅に向けた人間である。いまかれはまた同じ手口で、やみうちの矢を党に放ち、人民に放った。『前線』『北京日報』『北京晩報』に聞きたい。このような人間にたいして、きみたちはいつ批判をおこなったのか？

廖沫沙は朽ちはてた毒草を目のさめるような美しい花びらであるといいくるめた。反党・反社会主義の≪海瑞の免官≫はたいへんすばらしいので「もう一つ書くように」とか、反党・反社会主義の≪李慧娘≫は「有鬼無害」であり、「人びとの闘志をふるいたたせる」といった。右翼日和見主義すなわち修正主義の逆流をひきおこし、荒だたせ、社会におびただしい毒素をまきちらしたこれらの作品にたいして、きみたちはいつ批判をおこな

ったのか？

きみたちは、『妖怪変化を恐れぬ話』を出版したのは、帝国主義、修正主義、すべての反動派にたいする中国人民の闘争をはげますためであることを十分に知っていながら、わざと対抗劇を上演して、『前線』に廖沫沙の「鬼をおそれる『みやびのざれ言』」を発表し、中国共産党と中国人民にあくどい攻撃を加え、われわれの偉大な党と偉大な人民を「卑怯者、バカ者」とか、「大言壮語している」とか、「前にばかり気をとられて後をおろそかにしている」とか、「口先では鬼をおそれないといいながら、実際には鬼がおそろしくてたまらない」とか、中傷している。聞きたいのだが、きみたちはこのような文章を発表して、いったいなにをしようとしているのか？　中国共産党と中国人民はいついかなるとき鬼をおそれたことがあるというのか？　きみたちが偉大な中国共産党と中国人民にくわえた侮辱は、帝国主義、修正主義、各国反動派のそれとそっくりではないか？

一九六三年五月六日、梁壁輝(リャンビイホイ)（すなわち兪銘璜(ユイミンホワン)）同志が『文匯報』に、廖沫沙の「有鬼無害論」を批判する文章を発表し、つづいてその他の新聞・雑誌も批判をくりひろげたが、きみたちはこのときも依然として廖沫沙を批判する文章を発表しようとはしなかった。引きのばしをしたのち、どうしてもごまかしきれなくなって、しぶしぶ廖沫沙に手を貸して「わたしの『有鬼無害論』は誤りである」というあいまいな、大衆をあざむくニセの自己批判を発表させたのである。「階級闘争」を「忘れた」とか、「警戒心をうしなった」とか、「はっきりと一線を画すことができなかった」とか、「方向」を「見うしなった」とか、「ブルジョアジーと封建勢力が党と社会主義に気違いじみた攻撃を加えるのに無意識で助手の役をつとめた」とか、さももっともらしく、自分にささやかなレッテルを貼りつけた。

こうしたニセの自己批判では、もちろん、大衆をごまかすことはできなかった。読者はこのニセの自己批判をきびしく批判した。しかし『前線』にしろ、『北京日報』にしろ、『北京晩報』にしろ、どれも大衆のこのような正しい批判をかえりみようとはしなかった。なぜなら、きみたちにとって廖沫沙はしっかりと保護する必要があり、この反党・反社会主義の陣地は一歩もゆずることができなかったからである。

今年の四月十六月づけの『前線』と『北京日報』の「編集者のことば」は、いかにもこれまでの自分たちの口調を変えたかのように、「かれ（廖沫沙のこと）は決して『ブルジョアジーと封建勢力が党と社会主義に気違いじみた攻撃を加えるのに無意識で助手の役をつとめた』のではなく、意識的に、反党・反社会主義、反毛沢東思想の主将になったのである」といった。しかし、これはあいかわらずの中味のないレッテルであった。われわれは聞きたい。この廖沫沙は、いったいなにをしたのか？　かれの一連の反動的言動から、かれが、党内にもぐりこんだブルジョアジーの代表者であり、「鬼」に助勢し、帝国主義、修正主義、各国の反動派に助勢じ、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子に助勢したブルジョアジーの代表者であり、国内外の鬼と反共・反人民・反革命の統一戦線を結成したブルジョアジーの代表者であることをはっきりと見てとることができる。かれの反動的活動の事実については、きみたちの方がわれわれよりもずっとよく知っているのに、なぜそれを摘発しようとしないのか？　きみたちはいまになってもなお、「鬼」にとりつかれているようである。

きみたちは鄧拓を批判したことがあるか？

やはりない。

数年まえ、資本主義復活勢力を代表する右翼日和見主義分子すなわち修正主義分子が、さかまく社会主義革命

の大波のなかに逆流を引きおこした。かれらは、われわれの一時的な困難につけこんで、気違いのように党と社会主義に攻撃を加えてきた。鄧拓はこの気違いじみた攻撃のなかでの重要人物であった。呉晗、廖沫沙、鄧拓からなる〈三家村〉反党グループの組織者と指導者が鄧拓だった。一九六一年の九月、自らのりだして呉晗、廖沫沙をかきあつめ、あるホテルで会食してこの反党・反社会主義の殺人宿を組織したのがほかならぬこの鄧拓であったことをわれわれは知っている。殺人宿の名称をつけたのはかれであり、呉星南（ウーシンナン）という変名をきめたのはかれであり、文章を掲載するかどうかをきめたのもかれであった。〈三家村〉開業の歴史は、すなわち、鄧拓が呉晗、廖沫沙一味の反党・反社会主義のブルジョアジーの代表者をひきいて、文化・思想戦線でプロレタリアートと鋭い階級闘争をくりひろげた歴史なのである。

鄧拓はいったいどういう人間なのだろうか？　調査によってすでに明らかにされているように、かれは裏切り者である。抗日戦争の時期にふたたび党内にもぐりこんできた。かれは積極的な人間であるかのようによそおい、党と人民の信用をだまし取って、『人民日報』の重要な職務を担当した。かれはつねに自分の職権を利用して、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想をゆがめ、自分のブルジョア修正主義思想をおしひろめた。一九五七年の夏には、かれはブルジョア右派の参謀をつとめた。かれは反党・反社会主義の右派言論を大量に発表し、一九五七年五月十一日づけ『人民日報』には卜無忌（ボーウーチイ）の変名で「『凡人政治』を廃棄せよ」という文章を載せた。この文章は党に悪どい攻撃を加え、指導権をブルジョア右派にわたせと党に要求したものである。このほか、かれは党にたいする右派分子の気違いじみた攻撃を積極的に支持した。極右分子林希翎（リンシーリン）はかれのもっとも親しい友人であった。林希翎はかつてかれを中国の「非正統派マルクス主義者」だと呼んだことがある。これはつまり、ブ

ルジョア右派でさえかれが修正主義分子であることを知っていたということである。反右派闘争の勝利によって、鄧拓の資本主義復活の夢は破れた。かれは『人民日報』の職務を党中央から解かれた。かれは人民から「官」を「免」ぜられたのである。その後まもなく、かれはまた北京市委員会にもぐりこみ、ふたたび登場して、市委員会書記処書記になった。

鄧拓は闘争の戦術をよく「心得ていた」。一九五七年、反右派運動の怒とうは、かれに闘争形態を変えさせた。反右派運動のなかで右派分子が広範な大衆から批判され、たたかれた情景が、その後もかれに戦りつをおぼえさせた。

新たな階級闘争の情勢のもとで、かれは一九五七年に右派言論を発表したときのように、あからさまに登場するようなことはせず、いっそう陰険で狡猾な手口によってわれわれと闘争をすすめてきた。かれは、『前線』『北京日報』『北京晩報』の陣地をたよりに、むかしのことをもち出していまを風刺したり、他にかこつけてあてこすったりする手口で、つぎつぎと党と社会主義に毒矢を放ってきた。「卵一つの財産」「大風呂敷の物語」「外国の寓言ふたつ」「三種類の諸葛亮」「偉大な空言」「手を放せば下は地面」「労働力を大切にする学説」「友とまじわり客をもてなす道」「陳絳（チンチャン）と王耿（ワンケン）の事件」「李三才を弁護する」「崑崙山の人」「宛平（ワンピン）県の大・小米」「鄭板橋と『板橋体』」「知謀はたよりになるか」「王道と覇道」「手おくれ」「昔の漫画」「林白水（リンパイシュイ）の死」「『健忘症』の専門治療」などは、そのなかでももっともあくどいものである。

『前線』『北京日報』『北京晩報』は、むかしのことをもち出していまを風刺したり、他にかこつけてあてこすったりする手口で、党と社会主義にひじょうにあくどい攻撃を加えたこれらすべての毒草にたいして、これま

で批判をおこなったことがあるだろうか？　ない。ほんのわずかの批判さえおこなったことはなかった。

とくに、極反動的である「『健忘症』の専門治療」はひじょうにあくどい矢であって、その矢先は直接、われわれの敬愛する党中央に放たれたのである。鄧拓は、われわれの敬愛する党をほしいままに攻撃した。かれはわれわれを「犬の血」を「頭」からぶっかけ、外国特製の棍棒でわれわれの「頭」をなぐりつけて「人事不省」におちいらせ、それによって、かれらの「名医」、すなわち一握りの修正主義分子を登場させようとした。この気違いじみた反革命の随筆は、骨の髄まで党を憎しみ、人民を恨む鄧拓ら反党・反社会主義の修正主義分子の黒い腹をあますところなくさらけだしたものであった。

鄧拓の反党・反社会主義の気違いじみた行為は、広はんな読者の憤怒を引きおこし、読者は『前線』『北京日報』『北京晩報』に手紙を書き、きびしい批判をくわえた。だが、きみたちはこのような批判の手紙をいっさい載せなかった。載せなかったばかりでなく、逆に、ありとあらゆる手を使って、鄧拓の反党・反社会主義の犯罪行為を弁護した。きみたちは口では「百家争鳴」をいいながら、実際にはブルジョアジーの「一家独鳴」をおこなった。つまり、きみたちが党に反対し、社会主義に反対し、資本主義の毒を放つのは許すが、労働者・農民・兵士大衆、革命的幹部が党を守り、社会主義を守り、きみたちの毒草を根こそぎにするのは許さなかったのである。きみたちがやっていたのは、完全にブルジョア独裁であり、ブルジョア専制であった。

一九六五年十一月、社会主義文化革命戦線の情勢に急激な変化がおこった。あらたな反撃戦がくりひろげられ、鄧拓の協力者呉晗が暴露された。もし『前線』『北京日報』『北京晩報』に、ほんとうに鄧拓を暴露する気持ちがあったなら、このとき、きみたちはまだ、主動権を握る機会があったのだが、きみたちはそうしなかっ

た。そうしなかったばかりでなく、きみたちはあいかわらず、鄧拓に報告をしてもらったり、文章を書いてもらったりして、呉晗を支持し、かばったのである。

客観的な階級闘争は人の主観的意志によって左右されるものではない。闘争はたえず深まっていった。呉晗、廖沫沙、鄧拓がぐるになって党と社会主義に反対するその正体が、完全に明るみに出された。鄧拓をかばい、批判をおさえる『前線』『北京日報』『北京晩報』のやり方にたいして広はんな読者が、大きな不満と不平を示したので、どうしてもふたを開けなければならなくなった。このとき、きみたちは受身に立たされてたたかれるのを避けるため、そして、さらに重要なことは、もっとうまく鄧拓らを保護するために、あわてて鄧拓の問題をもちだしたのである。

鄧拓の問題をもちだしたねらいは、もっとうまく鄧拓らを保護するためである、こういう言い方は自己矛盾しているのではないか？　いや、決して矛盾してはいない。

三ヵ月あまりまえに、『前線』と『北京日報』は、呉晗を保護するために、呉晗を「批判」する向陽生の文章をすすんで発表したではないか？　鄧拓の問題をもちだしたのは、ニセの暴露と真の支持、ニセの批判と真の庇護、ニセの闘争と真の保護という醜い劇の再演にほかならなかったのである。

『前線』と『北京日報』は、「編集者のことば」のなかで、鄧拓が党と社会主義に攻撃をかけた問題を極力回避している。〈三家村〉でもっとも主だった人物である鄧拓が、『前線』と『北京日報』の「編集者のことば」では、もっとも重要でない位置におかれている。呉晗は「党と社会主義を攻撃」し、廖沫沙は反党・反社会主義の「主将」であるが、鄧拓は反党・反社会主義ではないのである。軽重を転倒させ、急所をおおいかくし、車角

を犠牲にして王を守る、これが『前線』と『北京日報』の鄧拓を保護するときにもてあそんだ一連の手口なのであった。

『北京日報』が発表した鄧拓「批判」に関する資料も、同様に鄧拓が党と社会主義に攻撃をかけた問題にふれていなかった。二ページの紙面を占める『燕山夜話』の抜粋は、最後で、人目を引かないごくありふれた小見出しを使って、鄧拓の「むかしのことをもち出していまを風刺する」問題にちょっとふれただけである。鄧拓の、党をあくどく攻撃し、総路線をあくどく攻撃し、大躍進と人民公社をあくどく攻撃する反動言論、右翼日和見主義分子すなわち修正主義分子の冤官、降職の冤罪をうったえると同時にかれ自身の冤官、降職の冤罪をうったえた文章はすべて、『前線』と『北京日報』によって、「俗流的で無意味」な、「自己陶酔」のものであって、せいぜい「封建社会制度を美化」し、ブルジョア思想を宣伝しているにすぎないと、さっとかたずけられている。

今年の四月十九日、『北京日報』はまた、「『燕山夜話』批判に関する参考用論題」なるものを配布し、「鄧拓は芸術上の復古派である」とか、「古人の楼台に立っている」とか、「芸術は古いものほどよいと宣伝している」とかいって、ひきつづき鄧拓を掩護し、鄧拓にたいする読者の批判のほこ先を「むかしを崇拝し、むかしに学ぶ」方向へ向けさせようとした。

党と社会主義に反対し、資本主義復活のために世論を準備するもっとも重要な政治問題がなくなってしまった。これを「批判」といえるだろうか？　誤りをおおいかくし、悪人をかばい、読者をあざむくものであるというほうが、いっそう実際と合致しているのではないだろうか？

『前線』と『北京日報』の「編集者のことば」は、「この闘争のなかで、われわれが得た教訓はひじょうに深

刻なものである。これまでわれわれは文化・学術戦線での階級闘争の手をゆるめていたため、党内外のブルジョアジーの代表者が虚に乗じてもぐりこみ、学術論文や随筆などの形式で、党と社会主義に反対し、新聞・雑誌のコラムを利用してかれらの『自由市場』を開くのを許した。……本誌および本紙は、これまでこれらの文章を発表したが、すぐには批判しなかった。これは誤りである。その原因は、われわれがプロレタリアートの政治による統率を実行せず、また頭のなかにブルジョアジーと封建階級の思想の影響があったため、このきびしいたたかいのなかで、立場を見うしなうか、警戒心をうしなうにいたったことにある」とのべている。

これを自己批判といえるだろうか？

「得た教訓はひじょうに深刻なものである」。どのような教訓だろうか？

「文化・学術戦線での階級闘争の手をゆるめていた」。ほんとうに手をゆるめていたのだろうか？

「党内外のブルジョアジーの代表者が虚に乗じてもぐりこみ、学術論文や随筆などの形式で、党と社会主義に反対するのを許した」。ほんとうに他人が虚に乗じてもぐりこんできたのだろうか？　ほんとうに他人に利用されたのだろうか？

「その原因は、われわれがプロレタリアートの政治による統率を実行しなかったことにある」。プロレタリアートの政治による統率でなかったとすれば、どの階級の政治が統率していたのだろうか？

「頭のなかにブルジョアジーと封建階級の思想の影響があった」。ブルジョアジーと封建階級の思想の影響だけだったのだろうか？

「そのため、このきびしいたたかいのなかで、立場を見うしなうか、警戒心をうしなうにいたった」。立場を

見うしなったということだろうか？　警戒心をうしなったということだろうか？

すべてそうではない。

『前線』と『北京日報』それに『北京晩報』は、ここ数年のかなり長期間にわたって、鄧拓、呉晗、廖沫沙らの、党と社会主義にたいする気違いじみた攻撃の道具になってきており、知らぬうちに他人に「利用」されたなどというような問題ではない。きみたちのこの陣地は、プロレタリアートの陣地ではなく、ブルジョアジーの陣地なのである。鄧拓、呉晗、廖沫沙らは、これまでかなり長期間にわたって、党北京市委員会と北京市人民委員会の事務室におさまって役人風を吹かし、命令を発し、修正主義路線を忠実に実行し、「平和的転化」の方法によって、資本主義復活の夢を実現しようとしてきたのであって、「ブルジョアジーの代表者が虚に乗じてもぐりこむのを許した」などというような問題では決してない。きみたちは、「赤旗」をふりかざして赤旗に反対し、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想のベールをまとって、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想に反対している。きみたちは、プロレタリアート独裁と社会主義のスローガンを口にしながら、プロレタリアート独裁を醜悪化し、社会主義制度を醜悪化している。きみたちは、共産党の看板をかかげ、党機関紙および党機関誌の名をかたって、党に反対し、社会主義に反対している。きみたちは、わが国の社会主義と資本主義の二つの道のきびしい闘争がくりひろげられているとき、一貫してブルジョアジーの立場に立ち、プロレタリアートとするどい階級闘争をすすめてきたのであって、決して階級闘争の手をゆるめていたなどということではない。きみたちには、プロレタリアートの政治による統率はないが、ブルジョアジーの政治による統率がある。きみたちのブルジョア反動思想はひじょうに頑強であり、ブルジョア反動的立場はひじょうに強固であり、ブルジョア反動的嗅覚はひ

じょうにするどく、ブルジョア党派性はひじょうに強い。つい最近まで、きみたちはオノをふりまわして、他人が鄧拓を批判した文章のなかの要所をすべて切り落とし、「これはあてはまらない」「あれは成りたたない」「他人がどうやろうと、われわれはあくまで学術の討論としてやる」などといってきたが、これをどうして、頭のなかにブルジョアジーと封建階級の思想の影響があったとか、立場を見うしなうか、警戒心をうしなったなどということができるだろうか？

ニセものはあくまでニセものであって、偽装ははぎとるべきである。紅おしろいを塗りつけても、醜い顔をおおいかくすことはできない。きみたちは、これまであれほど多くの毒をまきちらし、あれほど多くの妖怪変化をとび出させ、また、あれほど多くの悪質な手口をもてあそんで文化革命に抵抗してきたのに、いまわずかばかりの空言で、読者にたいしてすまされるとでも思っているのか？

いまや、『前線』『北京日報』『北京晩報』にとって徹底的に革命をやるときが到来した。国内外の階級敵が黒い風をまきおこしたとき、鄧拓、呉晗、廖沫沙の反党・反社会主義の活動を積極的に支持したのはだれだろうか？　鄧拓、呉晗、廖沫沙の反党・反社会主義の活動が革命的大衆の反撃にあったとき、さまざまな手口で鄧拓、呉晗、廖沫沙をかばったのはだれだろうか？　その後、鄧拓、呉晗、廖沫沙の問題がかくしきれなくなったとき、きみたちに「車角を犠牲にして王を守る」ニセの批判をやらせたのはだれだろうか？　これらすべての問題は、きみたちがおおいかくそうとしてもかくしきれるものではなく、回避しようとしても回避できるものではない。ごまかしは長持ちするものではなく、大衆の目はさえており、きみたちが摘発しなければ大衆が摘発するし、きみたちが批判しなければ大衆が批判する。われわれは、『前線』『北京日報』『北京晩報』の編集部のな

かの、革命をおこなおうとするすべての同志が、きっと勇敢に立ちあがり、毛沢東思想の赤旗をかかげ、ブルジョアジーの代表者と徹底的に手を切り、きみたちの反党・反社会主義の犯罪事実を大胆にあばきだし、批判するであろうと確信している。

鄧拓、呉晗、廖沫沙らの組織もあり、計画もあり、指導もある反党事件は、われわれの高度の警戒心を引きおこさざるを得ない。強大な社会主義革命勢力はつぎつぎとブルジョアジーの代表者を引きずりおろしたが、これですべてが終わりというのではけっしてない。今後も一部のブルジョアジーの代表者がひきつづき舞台にあがって出演してくるということをわれわれは見ておく必要がある。ちがうのは、かれらの演出形式が、露骨なものもあれば、比較的隠蔽されたものもあり、分散して出撃してくるときもあれば、集中して攻撃してくるときもあるというように、たえず手をかえ品をかえるだろうということだけである。われわれは、かならず現在の運動に積極的に参加し、断固として種々さまざまのブルジョアジーの代表者と闘争をくりひろげ、社会主義文化革命を最後までやりとげなければならない。

毛沢東思想で武装された中国人民は無敵である。すでにとび出した妖怪変化、まだとび出していない妖怪変化、舞台の上にいる妖怪変化、下にいる妖怪変化をとわず、すべてこの偉大な力をまえにして、一撃に耐えうるものではない。死期が迫り、気息えんえんとしている資本主義制度は、秋風に吹きよせられた落葉のようなみじめな運命に直面している。ひとにぎりの小さなアリがどうして社会主義という大空にそびえたつ大樹をゆさぶることができるだろうか？

① 一九三四年、廖沫沙は「林默」のペンネームで『大晩報』に「『花辺文学』を論ずる」という論文を発表し、魯迅

の革命的随筆を「花辺文学」であると攻撃した。魯迅はこのことばをつかって廖沫沙に反撃し、自分の随筆集を『花辺文学』と名づけた。『魯迅全集』第五巻、人民文学出版社一九五七年版、三四一ページ、三九七～四〇〇ページ参照。

（もと、『紅旗』誌一九六六年第七号に掲載）

中国の社会主義文化大革命（第二集）

1966年　初版発行　　定価 50 円

出版者　外文出版社
（北京阜成門外百万莊）

発行者　中国国際書店
（北京 P. O. Box 399）

編号：（日）3050—1459　　3—J—714P
00044